

台湾における立正佼成会の展開

渡 辺 雅 子 廣 瀬 幾 世

はじめに

日系新宗教の海外布教を考える場合、ブラジル、アメリカには現地に移住した日本人・日系人の存在があり、日系コミュニティを形成していた。同じく日本の植民地支配がありながら、韓国には強い反日感情があるのにひきかえ、台湾の場合、親日的な日本語教育を受けた台湾人がいた。台湾では、そのネットワークをととして日系新宗教の布教が行われたということがある。

本稿では台湾に布教した教団のうち、立正佼成会(以下、佼成会)をとりあげる。佼成会も日本語リテラシーの高い台湾人から入り、現在ではその世代の高齢化や死去により、転換期の状況にある。台湾には現在、台北教会と台南教会の二つの教会がある。

佼成会は、庭野日敬(1906-1999、開祖)と長沼妙佼(1889-1957、脇祖)によって霊友会から分派して1938年に東京都で設立された法華系の新宗教教団である。久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊を本尊とする。佼成会は法華三部経を所依の經典とし、夫方(父方)妻方(母方)双系の先祖供養と心の切り替えによる人格完成を目的として、菩薩道の実践を行う教団である。基本信行として、読経供養(經典読誦)、導き(布教)・手どり(会員の育成)・法座、法の習学がある。

現在の会長は庭野日敬の長男の庭野日鑛(1938生)で、1991年に法統継承し、二代会長に就任した。次代会長は日鑛の長女の庭野光祥となっている。教団の公称会員世帯数は110万世帯(教団HP, 2020年10月16日閲覧)、会員数は2,373,451人(『宗教年鑑』令和元年版)である。国内に238教会、海外は19カ国に69拠点がある。

ある。

本稿は台湾における佼成会の展開過程に着目する。筆者が現地調査を行ったのは2012年と2017年であるが、その時はすでに第一世代の主要人物は亡くなるか、高齢化しており、直接話を聞くことは難しかった。調査には時期があるとしみじみと感じた。また、本稿の第6章を分担執筆した廣瀬幾世は、2017年12月に台南教会長(この他、モンゴルウランバートル支部、香港支部、サハリン法座、上海法座担当)に就任し、新型コロナウイルスで台湾への渡航が難しくなった2020年2月まで、1カ月に1度、10日～2週間台南に滞在した。初期の会員の一部からは話を聞いていたが、当然のことながら、主な課題は台南教会の現況への対応だった。

しかしながら歴史的な展開については、この時期に明らかにしておかなければ、今後はさらにわからなくなっていくので、今回できるだけ解明しなければならないとの両者の認識のもとに取り組んだ。現地に実際に行つての補足調査はできない状況にあったが、本部発行の機関紙誌、本部所蔵の関連資料(発掘したものもあり)、勧請申請書などの書類、現地発行の機関誌、体験説法の原稿、現地の会員からのラインによる補足調査、日本在住で台湾布教にかかわった人々からの聞き取り調査等によって補足し、できるだけその歩みを正確に記述しようとしている。また、複数の年表が作成されていたが、記載に矛盾があるところもあり、裏付けの資料をさがして、年月を特定した。また、人の記憶はさまざまであったが、それについてもできるだけ客観的な資料で確認した。

現在、台湾には台北教会と台南教会の二つの教会があるが、本稿では主に2008年に台北教会、台南教会ができる前までに焦点をあてた。現在の台湾の佼成会は転換期にあり、さまざまな取り組みが行われているが、現段階はまだ動いている段階なので、今後の課題とした。資料的な制約はあるが、まずはこれまでの台湾での佼成会の歴史をできるだけ正確に記述することに主眼をおきつつ、単なる歴史ではなく、それを担った人々が躍動感をもってあらわれるよう

に留意した。なお、2020年10月現在の台北教会の会員数は689名、台南教会は200名である。

1 日本による植民地化と親日的台湾人の存在

台湾は日本がはじめてもった植民地である。日清戦争の結果、1895年に台湾が清朝から日本に割譲された。その後、第二次世界大戦で日本が敗戦し、ポツダム宣言によって台湾が日本から中華民国に返還された1945年までの50年間、台湾は日本の植民地だった。1937年以降、台湾では本格的な皇民化運動が開始され、日本語教育の強制、母語使用の制限、日本式姓名への改姓名が行われた。日本統治時代の台湾では、韓国とは異なって日本人と密接な関係をもつ台湾人が多く生み出された。その人間関係に基づく交流が戦後も続いた。また、戦前の日本語教育の結果、日本語のできる台湾人が存在した。

1949年に共産党との抗争にやぶれた蒋介石が、国民党政府を台湾に移転させた。それにとまって大陸から移住した人々である外省人と、植民地時代から台湾に在住していた本省人⁽¹⁾との間には軋轢がうまれた。少数派の外省人が権力をにぎり、多数派の本省人との間に亀裂が生じた。そのこともあって本省人の間では日本への親近感が醸成された。外省人は日本的要素を抑圧しようとするが、本省人の中には抑圧されたがゆえに、日本への親近感が続いた。日本統治時代の記憶が温存され、本省人の間では親日的な人が多かった。

言葉の点でも外省人は北京語(中国語)、本省人は台湾語(福建省南部で話されている閩南語から派生し、独自の発展を遂げたもの)、客家語を母語としており、北京語を理解できる人が少なかった。台湾語は同じ中国語といっても北京語とは非常に異なっており、双方の知識がないと互いに理解することができない。北京語は1949年以降、「国語」として学校教育の中で教えられている。

言語の点でみると、第一グループとして台湾語を中心として日本語を話す人、

第二グループとして北京語と台湾語を話すが日本語は話さない人がいる。第一グループには、日本に親近感をもつ本省人が少なくない。日本宗教を受容したのは主として日本の植民地時代に日本語教育を受けた日本語リテラシーの高い本省人であった。台湾語に対するアイデンティティは、地域的にみると、台湾の北部よりも南部のほうが強い。

2 台湾における日系新宗教の概観

台湾の日系宗教については、継続的に調査を行っている藤井健志の論考があるので、それを参考に、台湾の日系宗教についての全体像を概観したい(藤井2007)。

戦後の台湾における日本宗教の展開について、藤井は次のように四期に区分している。Ⅰ期：台湾人だけによる活動期(1945年～1960年前後)、Ⅱ期：布教・交流の開始期(1960年前後～1975年前後)、Ⅲ期：布教の活性化と組織化の時期(1975年前後～1990年前後)、Ⅳ期：布教鎮静化の時期(1990年前後～現在)である。

新宗教にかぎってみてみよう。Ⅰ期(台湾人だけによる活動期：1945年～1960年前後)に活動していた教団はごく少数である。敗戦後、宗教者を含む日本人は日本への帰国を余儀なくされた。1952年の日華平和条約の締結によって日本と台湾(中華民国)との間に正式に国交が開かれるが、この時期は日本人が台湾で布教するにはさまざまな制約があり、ほぼ不可能だった。そうした中で、戦前から布教をしていた天理教や生長の家では、日本人がいなかったにもかかわらず台湾人が主体的に活動を続けた。

Ⅱ期(布教・交流の開始期：1960年前後～1975年前後)では、創価学会、世界救世教、霊友会、立正佼成会、真如苑、本門仏立宗、仏所護念会、神慈秀明会、世界真光文明教団、阿含宗が布教を開始した。活動の際に使用する言語を日本

語から北京語に移行しつつある教団と、移行していない教団があるが、この時期は日本語リテラシーが高い本省人は健在だった。また、藤井は戦前に作られた関係が有効に使われているのが台湾の特徴で、それは日本人社会が存在しないことによって日本宗教の担い手になる集団がうまくいかなかったため、個々の人間関係の果たす役割が大きいと指摘している。また、布教にたずさわる日本人の台湾語もしくは北京語リテラシーは低いので、布教に際して日本語のできる本省人に依存しなければならなかった。日本宗教の展開にとって日本語を理解し、日本の宗教に関心をもつ本省人の集団を担い手にすることで、その展開が促進された。なお、1972年の日台国交断絶により、日本宗教の布教環境が一時的に少し悪化した。

Ⅲ期(布教の活性化と組織化の時期：1975年前後～1990年前後)では、1975年に蒋介石が死去し、70年代における台湾の国際的孤立は、むしろ台湾に対するアメリカの影響力を高め、国内では本省人エリートの登用が促進されるようになった。この時期には従来の国民党を中心とする強権政治が揺らいできて「自由の間隙」がひろがってくる。そして1986年の民進党結成をへて、1987年の戒厳令解除に至り、1988年には李登輝(1923-2020)が本省人初の総統に就任した。李登輝は親日家として知られ、「台湾民主化の父」とも言われる。

この時期は戦後の台湾で最も活発に日本の宗教が活動をしていた。なお、戒厳令の解除は1987年だが、法的には制約があったものの、1970年代後半から規制がおだやかになり、こうした背景のもとに日本の新宗教の組織的布教が活発になった。規制が緩和していくとともに、日本の宗教の側も中国仏教会、中華仏教居士会等との交流によってその傘下に入るなど「借傘」といった方便を使い始める。

Ⅳ期(布教鎮静化の時期：1990年前後～現在)では、日本宗教に対する法的規制はほとんどなくなり、日本の宗教はこの時期に法人化される。しかし、活発な活動をしている一部の教団を除くと日本の宗教の活動は停滞してきている。

その一つの要因として、これまで日本宗教の担い手であった日本語リテラシーの高い本省人が高齢化し、新たな担い手の集団を見いだせなくなっているケースが少なくないからである。台湾人の若い世代は日本語を話せず、日本の宗教に関心を持つ人は少なく、また1990年代以降の新しい台湾の仏教教団や台湾うまれの新宗教⁽²⁾の興隆は日本の新宗教の発展にはマイナスになっているという。

3 台湾における立正佼成会の組織と法人の推移

(1) 台湾布教の三つの系統

佼成会が台湾に入るにあたって、三つのルートがある。地域的にいえば、台北、台南、屏東である。佼成会では導き(布教)に際して導きの親と導きの子があり、もともとは導きの縦系統とのつながりが強かった⁽³⁾。台湾においても導きの系統の日本の教会とのつながりや影響が強く、個性を持って展開した。一粒種の入会は屏東が一番早く1967年(范涂玉英)、台北では1971年(簡汝廉)、台南では1975年(莊金泳)である。詳細については次章以下で記述するが、簡単に述べるならば、屏東は本省人の女性の会合が開かれていた仏教寺院に日本から佼成会信者が来たことがきっかけになり、台北では一人の本省人が仕事で日本に行った時に旧知の日本人から佼成会を紹介された。台南は仕事で台南に来た日本人信者が仕事上の関係をもっていた本省人を導いた。

屏東は東京都の目黒教会、台北は東京都日野市の豊田教会(入会時は東京都の中野教会)、台南は秋田県大館市の大館教会の系統である。台湾での佼成会は、各拠点が導きの系統としての日本の所属教会の法座所という位置づけから始まった。なお、佼成会の本部に国際課が設置されたのは1974年のことで、1984年には海外布教区となり、その後1988年に教務部海外布教課、2002年に海外布教グループ、2004年には国際伝道グループ、2007年に教務部の一部門から独立

して国際伝道本部、そして2015年には国際伝道部と名称や規模を変え、格上げされている。

(2) 中国仏教会との交流調印と法座所の設置

佼成会の布教が始まった当時、台湾は戒厳令下にあり、集会の制限や日本語の本や雑誌についても検閲があり、布教するには困難な状況にあった。台湾の会員から正々堂々と佼成会会員であることを名乗り活動ができるようにとの願いに応じて、佼成会本部は1977年からそのための調査を行った。「中華民国台湾省における宗教法人取得のための調査報告」によると当時の状況について、「共産主義思想の侵攻に対する警戒から、集会・結社の自由が制限され、5人以上の集会を一般の家で行う場合は事前に所属の警察局に届け出を行い、許可を得なくてはならないこと、法座も事前に届け出ればできるが、警察が事前調査に来るので圧迫を感じ、積極的にはできないこと」が記されている。そこで、台湾の仏教寺院を統括する組織として中国仏教会と交流関係を樹立することによってその道がひらけることがわかった(『佼成年鑑』1979)。

1979年から準備を進め、同年11月に中国仏教会所属の重鎮僧侶を日本に呼んで話をつめ、1980年3月9日に、台北市にある中国仏教会で「中国仏教会・立正佼成会の親善交流に関する同意書」の調印が行われた。佼成会側からは長沼理事長、西川教務部長、荻野施設部長(台北の簡の導きの親)、宮坂国際課長、范涂玉英女史らが訪台参加し、中国仏教会から、会長・白聖法師、理事・浄心法師を含む仏教会代表と関係者多数が出席した(『佼成年鑑』1981)。この調印締結にあたって、范涂玉英の役割は大きかったようである。范は台湾(屏東)での最初の入会者であり、台湾初の本尊拝受者、そして夫は医師、仏教婦人会の会長経験者、家庭裁判所調停員経験者でもあり、近い親戚に内政部の高官がおり、上流階級に属する人だった⁽⁴⁾。調印式のあと、台北の簡汝廉宅や高雄で集まりをもった。中国仏教会との交流がますます盛んとなり、台湾布教実現へ大



写真1 「中国仏教会・立正佼成会の親善交流に関する同意書」の調印式
(1980年立正佼成会提供)

中国仏教会からは会長・白聖法師(前列左端), 佼成会側からは長沼基之理事長(前列右から2人目)が調印。



写真2 調印文書の交換(1980年, 立正佼成会提供)
白聖法師(中央左)と長沼理事長(中央右)

きく一歩近づくことが期待された。

1980年に中国仏教会との交流関係が樹立されたという背景のもと、拠点地域では法座所が設置される。台南では1983年1月に大館教会台南法座所が設置された。台北では1982年に三重市(台北の近郊)にある簡の自宅にて30名が法座修行を開始し、1985年4月に豊田教会台北法座所が設置された。屏東では1985年6月に目黒教会屏東法座所が設置された⁽⁵⁾。

1988年には海外布教課が設置され、本部の海外布教に対する姿勢もより積極的になった。1988年の動向については『佼成年鑑』1989に以下の記載がある。

「1988年の創立50周年記念団参(団体参拝)に台湾地区からは4月27日～5月14日に92名が参拝した。7月には台湾の幹部会員6名が1カ月間、本部で教育課講師による研修を受講した。台湾に教育課員、教会幹部を派遣し、台北、台南、高雄、屏東の4カ所に対して延べ9回の布教支援を行った。海外の新入会員のための手引書がすでに英語で製作されているが、これの北京語、韓国語、ポルトガル語の各国版の制作を実施した。台湾本土では布教拠点が数カ所に分散しており、しかも日本国内の各教会の直轄となっている。将来これの一つにまとめ、現地法人格を取得するため現地幹部がその手続き等に努力しているが1988年内には許可がおりなかったので、引き続きその支援をしていく。また、北京語による本会紹介ビデオの作成にとりかかった。これは、従来台湾の会員より強い要望があったため、計画されたものである。」

1988年8月には、初めての台湾幹部研修会が行われた。これは前述の布教支援の一環のものだと思われるが、本部から講師が派遣され、台北、台南、高雄、屏東から会員45名が台中の温泉地に集まって8月9日から2泊3日で研修をした。本部からの斉藤講師(男)は、導きと手どりについて、清原講師(女)は法座について具体的に事例をあげて説明した。(動画「佼成ニュース」1988年10月号)⁽⁶⁾ この研修会上で、日本語世代以外の世代への佼成会の教えの布教について議論されていたので、上述の北京語による紹介ビデオ作成もこの研修会での意見を

受けてのものだと思われる。

台北法座所、台南法座所、屏東法座所は豊田、大館、目黒という異なる教会所属となっていたが、1989年12月に、これまでの拠点別教会所属から本部直轄となった。(『佼成年鑑』1990)

(3) 社団法人中華在家仏教立正佼成会(台湾教会)の設立

1992年10月には中華民国内政部から社会团体法人(社団法人)中華在家仏教立正佼成会が認可された。1993年1月に立正佼成会台湾教会が設立され、翌2月に発会式が行われた。それに伴い、台北、台南、高屏(高雄・屏東が合体)の法座所は支部に昇格した。発会式と当時の状況について、1993年2月19日号の佼成新聞では以下のように紹介されている。「発会式には台北、台南、高屏の三支部あわせて300人が参加した。三支部の合計会員世帯数は1500、法座、説法会、教学研修のほか、青年を対象とした日本語教室、生け花教室を開催、施設慰問や救済事業基金として『愛心会基金』を設立、地域の福祉向上にも取り組んでいる。また昨年(1992年)9月には翻訳委員会を設立、語学専門家の参加を得て、台湾語による研修教材の開発を行っている。」

1993年9月25日には庭野日鑑会長を迎え、中華在家仏教立正佼成会(会員世帯数約2000)の入仏式が行われた。金色の肌、こげ茶色と濃緑色が施された衣の極彩色ご本尊である(日本国内外で例がない)。その後、中華在家仏教立正佼成会主催、中国仏教会協賛の中日仏教弘法大会が台北と台南で開催され、庭野会長が「生活と仏教」をテーマに講演した(佼成新聞 1993年10月8日号)。

台湾教会は台北支部と同じ場所におかれた。1992年12月には台北市の中心部に位置し、利便性の高い衡陽街の雑居ビル(地上15F地下3F)の8F(137坪)を本部が賃貸し移転した。台湾教会には日本人教会長が派遣され、初代教会長として田中伸佳(1927-2015)が就任、台湾教会の御旗が勧請された。1996年12月には矢野泰弘(1942-2005)が二代教会長に、1999年12月に後藤益己(1941生)が

台湾における立正佼成会の展開



写真3 台湾教会入仏式で講話をする庭野日鏡会長(1993年、立正佼成会提供)
宝前中央は極彩色本尊、左は「天人常充滿」右は「我此土安穩」の額。左の写真は庭野日敬開祖、右の写真は長沼妙俊協祖。



写真4 中日仏教弘法大会(台南市)での庭野日鏡会長の講演(1993年、立正佼成会提供)
左に日本の国旗、右に中華民国の国旗。横断幕の左右と演台に佼成会の会紋がある。



写真5 創立50周年記念団参で、台湾の会員が大聖堂にて庭野日敬会長(当時)に挨拶
(1988年、立正佼成会提供)
台湾から92名が参加した。



写真6 開祖生誕100年記念団参で台湾教会がお会式行進に参加(2006年、立正佼成会提供)
台湾教会の人々が着ているのは台湾の少数民族の衣装。

三代教会長に、2004年12月に長本晃一(1947生)が四代教会長に、2006年12月には齋藤光央(1944生)が五代目の教会長に就任した。なお齋藤のみ南アジア伝道区長兼務であった。常駐の教会長は台湾教会がおかれている台北支部を拠点に、台南支部、高屏支部を毎月回った。

(4) 三法人への分裂

1992年10月に中華在家仏教立正佼成会が社團法人として登記、台湾政府から許可を得たことは先述のとおりである。そして、立正佼成会台湾教会として、一つの法人のもとに、台北、台南、高屏の三つの支部が存在した。しかしながら、2000年6月に社團法人中華在家仏教立正佼成会を解散し、三支部各々が社團法人として法人格をもつように分裂することになった。台北は「社團法人在家仏教立正佼成会」(法人格取得 2000年1月5日)、台南は「社團法人台南市在家仏教立正佼成会」(同 2000年4月16日)、高屏は「社團法人立正佼成会屏東仏教会」(同 1999年10月23日)の三つである。

一法人発足以来、三支部合同研修会を行うこともあったが、次第に三支部は頻繁に不協和音を発し、さまざまな問題が出てきた。特に台湾教会(台北支部同居)が設置されている台北支部にのみ、1992年以来、教会道場家賃として月100万円の本部からの家賃助成をもらっていることに対する他の支部からの批判と反感が不調和の一因であった⁽⁷⁾。台北支部には現道場移転以来の事情と苦悩があり、他支部には利害と不平等に関する不満があり、それが不和・対立の要因の一つとなった。

三支部は、地域性、住民感情が異質なうえに、導きの教会の系統が異なるという拠点成立背景の相違、民族の違い、信仰風土・文化思想背景の違い、日常言語の違い、慣習の違い、政党支持の違いといった南北の地域性が異なり、尊厳と独立性を求める住民性、布教方針の違いと法人会費使途のあり方についての見解の相違、法人会費納入額と納入時期の相違などから常に運営に支障が起

台湾における立正佼成会の展開



写真7 三支部合同青年部の一泊錬成会での研修風景(1997年, 立正佼成会提供)
台北, 台南, 高屏の三支部から青年57名, 幹部17名が参加。



写真8 錬成会のレクリエーションでの太極拳の練習(1997年, 立正佼成会提供)

きていた。また地理的遠隔さから生じる布教活動には障害と会計事務の遅滞が生じていた。

三支部間の不信、不和、感情対立が激化し、法人の運営、信仰活動に支障がおきるようになった。とりわけ、1998年の三支部合同青年部一泊錬成(各支部幹部も参加)のさい、三法人熱望の動きがその極みに達した。そこで三支部の三法人化が唯一最善の方策という結論にいたった。そして三法人化が実現した時点で中華在家仏教立正佼成会は発展的に解散することになった。政府認可の形式(内政府認可)での三法人化は可能であるということだったが、それが不可能な場合は各々の行政区で申請することになり、実際には後者の形での認可になった⁽⁸⁾。

なお、三支部共通の危惧として、日本語世代の高齢化と引退者の続出(病気、死亡が顕著)、高齢幹部層の法の継承の願いと心配、次世代層(中堅会員、青年層)の現体制下での継承について不安と難色があった。

(5) 台北教会・台南教会の設立

本部では海外布教を推進すべく、国際伝道グループを2007年に国際伝道本部に昇格させた。前年の2006年の開祖生誕100周年を期して、現地人の現地語による布教伝道が目された。第10次教団基本計画を元にした国際伝道計画(2007年6月)がたてられ、そこでは現地人への布教の強化、布教の現地化の推進が標榜された。その過程での現地人教会長の誕生だと思われる⁽⁹⁾。

その一環として、台湾教会を台北教会、台南教会の二つに分割した。2008年12月に台北支部とそのもとにあった台中法座所、基隆法座所を構成要素として、台北教会が設立された。台北支部の理事長だった簡汝廉は2007年に死去していたので、簡の娘(次女)で支部長の簡妙芳が教会長に就任した。また、台北支部が教会に昇格したのに伴い、台中法座所と基隆法座所は支部に昇格した。同時に、台南支部と高屏支部を併合するかたちで台南教会が生まれた。台南教会の

もとに台南支部と高屏支部の二支部構成になったのである。台南教会長として、支部長の莊金泳が就任した⁽¹⁰⁾。

教団の国際伝道計画(第一次)の最終総括(2011年10月に国際伝道本部提出)によると、「台湾は二教会に分割され、ともに台湾人の教会長が登用されることにより、本格的な台湾人布教の新たな段階に入った。特に三法人に分割されて以来、それぞれの独自性が強く、協力関係がなかなか生まれない状況があったが、創設者世代の交代が進み、ようやく協力して台湾布教を進めていく土壌が生まれてきた。特に屏東法人については法人が解散され台南法人に併合されることによって結果的に組織的な布教が展開される素地ができた」と書かれている。

なお、台北教会基隆支部は2013年に、台中支部は2017年に、会員の高齢化や死去により維持が難しくなって閉鎖された。台南教会の場合も、高屏支部は、2011年11月に法人解散、2013年2月に支部道場閉鎖となった。

したがって現状は、台北教会と台南教会の二つの教会のみが残り、他の支部はないという状況にある。台南教会については、莊金泳が2012年3月に死去したあと、2012年8月に支部長だった蔡麗金が教会長になり、また、半年の休職期間をへて2017年11月に退任のあと、日本人の廣瀬幾世が教会長が就任した。

このように、個別の日本の教会のルートを通じての布教の流れがあり、1980年に中国仏教会との交流調印締結後、導きの系統教会の法座所という形で法座所を設置、1989年に本部直轄になった。その後1992年に中華在家仏教立正佼成会として社団法人化され、1993年には立正佼成会台湾教会として、台北、台南、高屏の三支部は台湾教会の傘下にあったが、2000年に法人を解散し、三つの法人(地域の社団法人)にわかれた。そして、2008年には台北教会と台南教会を設立し、現地人を教会長とした。

ここまでは全体像をみてきたが、以下で、台北、台南、高屏の展開について個別にみて行きたい。

4 台北教会の展開

(1) 簡汝廉の佼成会入会とその経緯

台北教会の原点は、簡汝廉(男、1926-2007、選名⁽¹¹⁾：廉征)が、1971年1月28日に東京の中野教会で荻野高男(簡の入会当時は佼成会本部の営繕課長、のちに施設部長、静岡教会長、教団理事)の導きにより入会したことにはじまる⁽¹²⁾。荻野は、日本統治下の台湾で、簡の故郷の嘉義(台湾西南部)に兵隊として駐留していた人である。軍の宿舎として使用していた小学校の校長の息子が簡であった。当時、中学1年生だった簡は、学校から帰ると小学校に行き日本兵隊と遊んだ。兵隊に可愛がられ、とくに荻野上等兵に気に入られていたという。荻野の部隊が台湾を離れる時に、荻野は軍服姿の自分の写真の裏に日本の住所を書いたもの(名刺という説もある)を簡にわたし、いつかまた会おうと約束を交わした。

簡は、高校卒業後さまざまな職に就いた後⁽¹³⁾、1970年代に日本の小林製薬に就職し、台湾の支店で薬の輸入や販売などを行っていた。仕事の関係で東京に出張する時に、以前、台湾に駐留していた荻野のことを思い出し、その時にもらった住所を頼りに荻野の自宅を訪ねた。

荻野の妻から荻野は佼成会に勤めているので、会いたいならば本部に行ってみようと言われ、佼成会を訪ねた。当時、荻野は教団の営繕課長の役についており、旧交を懐かしんだ。35年ぶりの再会だった。翌日、荻野の案内で、本部大聖堂での法座をみて感動した。簡は長年にわたり、家族と別居して高雄で仕事を続けていたが、仕事や家庭(夫婦関係)が万事うまくいかない状況だった。そのような時に仕事で東京に行った際に、荻野を介して佼成会と出会ったのである。簡は妻との間のことで悩んでいると伝えたところ、荻野より、「それならば立正佼成会に入会して修行するのがよい」と言われ、荻野の導きで中野教会で入会した。総戒名を台湾に持って帰り、祀りこみは自分で行った。

総戒名とは、夫方(父方)、妻方(母方)の両家の先祖すべてを象徴する礼拝対象で、「諦生院法道慈善施先祖○○家徳起菩提心」と書かれており、上(縦書きなので右)の○○家の箇所には夫方(父方)の姓を、下(同左)には妻方(母方)の姓を書く。日本では、佼成会に入会するとまず、総戒名を祀りこみ、これに合掌礼拝して朝晩読経供養(經典読誦)をすることが修行としてかかせないものとされる。佼成会の先祖供養の特徴は、イエ的単系的先祖ではなく、双系的先祖である⁽¹⁴⁾。

簡と妻はその時十数年にわたる別居状態だった。この間の経緯について、台北での布教に貢献した妻の簡林清月(1928-1987)は、1984年8月の本部大聖堂での体験説法において次のように語っている⁽¹⁵⁾。布教にあたって彼女の力は大きかったので、それを引用しよう。なお、台湾では姓名の最初に夫の姓、次に自分の姓を入れる。(なお最近では夫の姓を入れない人も多くなった。)

「主人が入会したとき、その時主人は南部の高雄に住み、私は北部の三重というところに住んでいて、南北離れての別居状態でした。この状態は十幾年もつづき、なんの解決もせず各々の生活をしていました。原因は十幾年前、主人が周囲の友達に利用され、そそのかされ、真面目な仕事につかず日々不規則な日を送り、最後は負債をかかえ、真面目に働いて負債を返済して、家庭を幸福にすると行って南部に行ったものの、しかし、それっきり、負債をおいて妻子もふりむかず、音沙汰なしになってしまった。

私は一人娘で相談するきょうだいもおらず、父母には心配するので何も言えず、5人の乳幼児をかかえて借金の返済、生活、子供の教育におわれた。毎月もらう給料は借金返済で空っぽになり、食べる米さえなかった。死んだほうがましと思った。しかし、子供を思うとそうもできなかった。悔し涙をながし、女一人の力で子供5人を立派に育てると自分を励ました。学校での授業時間以外に家庭教師をし、建築の修繕工事の仕事、造花づくりなどで一心不乱に働いた。貧しくても世話好きだったので、周囲の友達が増えた。子供もよい学校に

入り、負債も徐々に消えていった。

ある日友達から、あなたの主人は日本の仏教会に入会して毎朝お経を読んでいると聞いた。あのような人が仏教会に入るなど信じられないので、一つ確認してこようと、南部に行った。会社に行ったが夫はいない。会社の会計担当者が夫の部屋に案内してくれた。部屋に入って目についたのが仏壇だった。なぜ寝室に仏壇があるのだろうか。壇上に經典とりんがある。そして壁に総戒名が貼ってあった。そして不思議なことに簡と林両家の先祖を祀ってあった。林家を祀ってくれたことのありがたさを感じた。」ここに、夫方と妻方の双方を祀る佼成会の総戒名に、妻方として林家が祀ってあったことが、のちに清月が布教に邁進する一つのきっかけとなった。

(2) 簡淑姿の本部と豊田教会での研修

簡が佼成会に入会したからといって、もちろんすぐさま家族と同居することにはならず、台湾の南部と北部に分かれての生活だった。しかしながら、簡の大聖堂での体験説法(1990年4月8日)の原稿を読むと、佼成会の教えを学ぶ中で、会社の従業員の人々との接し方や、別居している家族への接し方が変わり、家族とコミュニケーションもいくらかとれるようになったことがわかる。

1975年12月に簡の長女の簡淑姿(1950年生)は本部に研修に行くことになった⁽¹⁶⁾。長女が研修に来日するようになった理由については、これまで流布されていたのは、荻野が簡に娘を学林(全寮制青年対象の人材養成機関)に送るようにと勧めたことがあげられていた。しかし、簡の体験説法の中に、「長女から日本の病院につとめたいので、紹介してもらえないかとの連絡があり、荻野さんに相談したところ、佼成病院の看護師としてのかたわら研修生として2年間受け入れるとの返答があった」と記されている。また、台北教会長経由で、アメリカ在住の姉の淑姿に尋ねてもらったところ、「同級生が看護師交流学习で、東京の病院での勤務を申請した。父親から佼成会にも病院があると聞き、

本部(荻野)に連絡してもらった。しかし佼成病院は政府の許可する看護師交流の対象になっている病院ではなかったので、働くことはできず、病院には3～4回行って学んだだけだ。養成館に泊まって、教団が特別に招聘してくれた大学を退職した教授から日本語を学んだ。もっと勉強したいと希望したので、もともとは中野教会の会員だったが、豊田教会にお手配をいただき、約1年半教会で修行生活をおくった」と述べている。また、当時は日本行きのビザをとることは難しかったので、看護師としての能力を高め、日本で働きながら賃金を得て、国に貢献するという名目でビザをとり入国した。

淑姿は、1年目は本部の養成館という宿泊施設に泊まって、本部が手配した日本語教師のもとで日本語や法華三部經の学習をした。2年目以降は、豊田教会(東京都日野市)の菊地規予教会長(女、1908-1998、1969-1979年まで豊田教会長)のもとで法華經、導き、手どり、法座を学んだ。菊地は多摩支部の松田フジ子支部長(女、1927生)と小形キミ江主任(女、1932生)に淑姿の面倒をみるように指示した⁽¹⁷⁾。松田によると、淑姿の当時の生活は宿直(道場には会員が宿直として宿泊)の起きる前に起きて水行と三部經の読誦、その後は教会活動に参加し、また夜遅くまで三部經についての学びを深めていったという⁽¹⁸⁾。

また、簡は日本出張の折には豊田教会に行って娘と会い、その時に家庭円満について菊地教会長から厳しい指導を受けた。そして、佼成会の教えや実践の内容と娘の実習の様子を妻に手紙に書くと、妻からも時々手紙をもらえるようになった。

淑姿は学び始めるとその教えに感動し、母の清月に来日を勧めた⁽¹⁹⁾。清月は淑姿の帰国直前の春休み(1978年3月と推定)に迎えに行きがてら豊田教会に行き、そこで、多摩支部の松田支部長、小形主任の指導の下、会員とともに導き、手どり、法座などの実践修行を行った。また、清月が到着した翌日、淑姿が体験説法をし、その中で、現実の自分の家庭の状況を嘆き、和合を願うという内容に心を打たれた。清月は豊田教会での実践を通して佼成会の教えは生き

た仏教であると感動し、この時、心から入会したと述べている。そして、自分が救われたように布教に精進するつもりで帰国した。

この淑姿の豊田教会での1年余にわたる研修という縁をきっかけとして、また荻野は本部の要職にあるので、直接面倒をみるのは難しいという事情もあり、荻野の勧めにより、簡一家は中野教会から豊田教会に転籍した。

その後、しばらくして、簡の勤務する会社の景気が悪くなり、高雄の会社をしめることになったので、簡は台北にひきあげてくることになった。清月自身も、これまで恨みに思っていたが、自己点検すると、頑固、勝気、冷たい、出すぎて女らしくないことに気づき、簡一家と一緒に暮らすようになった。

(3) 簡林清月の布教と法座修行の開始

1978年に帰国後、淑姿は半年後に看護師の仕事に戻った⁽²⁰⁾。当時、若者向けに無料の日本語教室を開いたこともあったが、若い人は日本語ができず、反日の人もいたので布教は難しく、日本語世代への布教の中心になったのは清月だった。1978年に簡家に本尊を勧請した。しかしながら、当時は戒厳令下であり、宗教活動や集会は自由に行えなかった。5人以上が集まる時は警察に届け出なくてはならず、集会するのも難しい状況だった。1980年の中国仏教会との交流調印の後、長沼理事長は簡宅を訪問したが、この交流調印によって大っぴらに宗教活動を行う基盤ができた。

清月は教員であったが、教員仲間、教え子の親、近所の人、友人・知人などを導いた。次女で現在台北教会長の簡妙芳によると、「母は父の変わりようと信仰の熱心さを見て、そして、先祖供養に実家の先祖も含まれるところに感銘を受けて布教に熱心になっていった。教員仲間や近所、教え子の親を導いた。いつも帰ってこない夫が佼成会に入会することによって帰ってきたこと、そして自分が一生懸命布教している姿を法の証明役として人を導いた」と述べている。清月と同じく小学校の教員で、ごく初期に入会した呉玉桂(女、1930生)も

夫婦関係の問題を抱えていたが、清月はたくさん小学校の教員を導いたこと、そして戒厳令下で日本語の本を手に入れることは難しい中で、簡が佼成会の機関誌をみせてくれたことについて言及している。日本語世代がいた時は日本風のままとりいれており、初めは日本語の経典しかなかったので、日本語のわかる人は導きやすかったという⁽²¹⁾。

1982年に、簡夫妻は台北近郊の三重市にある自宅で、導いた友人30名と法座修行を開始した。1983年には簡宅では守護神(御守護尊神)を拝受した。1984年には清月は21名の台湾の会員とともに訪日し、2週間に渡って豊田教会で布教実習(豊田教会12名、大館教会9名)を行った。その際、大聖堂で体験説法を行った。

体験説法の中で清月の導きの様子と1984年当時の台北での動向が出ている。「導きの子の中で三名が組長になっていて、本尊を拝受した。そしてその中の一人の王さんはかつてのクラスメートで同じ因縁の人で一番初めに導いた人であるが、入会した後も何回となく家庭に不和が起きて離婚しそうになり、繰り返し結んでもらった。また、反対を押し通してもらった嫁に医学鑑定では女の子が生まれると言われたが、祈願して導きにまわり、数体導きができ本尊を拝受した時に、不思議なことが起こり、嫁が生んだのは男の子だった。この奇跡で、夫の態度が一変し、嫁をかわいがり、妻にもやさしくなり明るい家庭になった。また他の会員も車の事故にあいながらかすり傷ですんだというような不思議なことが会員の中に次から次に起こっている。この体験を伝えると入会者が増え、菊地親教会長からの指導と励ましがあがり、松田支部長、小形主任の熱心な(台北への)訪問と指導で、台北では会員が137世帯になっている」ことについて言及している。この王が、最初の法座所の場所を提供した人である。

(4) 豊田教会台北法座所の設置

1985年4月には、豊田教会台北法座所が保安街に設置された。これは会員(王

李素貴組長、清月が最初に導いた人)所有のビルの8階(9階部分は吹き抜け)と10階で構成され、10階に本尊が安置されている。王から無償で提供されたものである。この時には豊田教会から菊地前教会長、鈴木基予教会長(女、1944年生、1979.12～1989.12豊田教会長)、松田支部長、小形主任が入仏式に訪れた。翌1986年の豊田教会創立35周年には台北から100名が団参に行った。また、台北では現地の風習に合わせて観世音菩薩をまつているが、法座所の8階に1986年に安置された。(以後移転しても同様にまつられている。)

1980年代は毎月のように豊田教会の人々(とくに松田と小形)が台北を訪れた⁽²²⁾。菊地は台北に力を入れ、台湾は第二の故郷と言っていた。教会長退任後もその弟子の鈴木が教会長だったこともあり、布教支援は継続し、松田によると、5年用のパスポート5冊分の渡航を行ったという。また、入会者があるたびに、総戒名を豊田教会から持参した。戒厳令下(1987年に解除)であるので、総戒名や機関誌を腹巻の下に入れて隠して持って行ったりした。

法座所開設の時には鈴木教会長が軸装の大本尊を持参した。仏具を日本から先に送っていたが、通関できなかった。当時、仏具の通関には、台湾の仏教会の認可書が必要だった。鈴木は「簡さんから『入仏落慶が近いのに入らない』と電話があった。これは仏さまの説法だと思った。一丸となって布教しないといけない。仏教会の知り合いはいないのかと尋ねると、王さんのご主人が仏教会の役員をしていた。早速許可書をいただいて入国できた」というエピソードもある。

(5) 豊田教会からの布教支援と簡夫妻の役割

清月は台北で布教に力があつた。また豊田教会の菊地教会長が台北に力を入れた。菊地の指導の様子と清月の様子について、1980年代に菊地の後任教会長になった鈴木基予は次のように語っている⁽²³⁾。

「菊地教会長さんは、多摩支部の松田支部長さんと小形主任さんに淑姿さん

の面倒を見るように託した。長女の淑姿さんは、学び始めるとその教えの素晴らしさに感激し、台湾にいる母親に法華經の素晴らしさを伝え、ぜひ日本に来て、学ぶことを勧めた。早速、母親が来日し、淑姿さんが泊っていた豊田教会の寮の2階に泊まり、娘と一緒に、松田支部長さん、小形主任さんの指導の下、法座、手どり、導きの修行を行った。この母親が素晴らしい。母親は教師であり、当時の上流階級の方の知り合いがとても多かった。台湾に帰ると、お医者さん、学者さん、社長さんの奥様などを次々に導いた。その中の1人に王さんがいた。彼女も社長夫人として何不自由のない生活をしていたが、夫の愛人問題で悩んでいた。そこで、簡夫人は王さんを日本に誘い、菊地教会長さんの指導を受けるように勧めた。そこで王さんも簡夫人と一緒に来日した。菊地教会長さんの素晴らしいところは、徹底的に悩んでいる人の話を聞き切るところにある。王さんの場合も、2人きりで夜も同じ部屋で休み、決して人には打ち明けられなかった愛人問題を聞いた。王さんも初めて、今まで人には言えなかった悩みのすべてを話すことができた。そこで、菊地教会長さんは、まずは夫に対する見方がどうであったかを本人自ら顧みることができるように接し、本人にやはり自分にも足りない面があったかなと気づかせる。その上で、具体的に、家庭での実践を事細かに指導した。菊池教会長さんは、必要とあれば、個人指導を徹底的にされた。要は、人が救われるために、その人その人に合った触れ方をした。そこで、聞いてもらった人は感激し、教えを身につけていく。王さんを導いたことで、簡夫人も共に修行する中で、自身を振り返っていくことになる。菊地教会長さんは、苦しみを聞いて、その人の切ない気持ちを聞き取る。『ご主人をこういう見方で見てごらん』。実践すれば結果が出る。主人が浮気をしなくなる。それを簡夫人や王さんはまるで吸い取り紙のように吸収していった。こうして簡夫人も王さんも元気を出し、夫は浮気をしなくなった。簡夫人は、実にはっきりと物を言う所があった人。しかし、布教の面では、実に素晴らしかった。簡さん自身は、導きは苦手だった。ほとんどは奥さんの方が導い

た。やはり悩みが救われた人の布教力は絶対だ。

簡夫人は導きの子にどんどん本部で御本尊勧請、御守護尊神の勧請をさせる。すると、日本の本部での勧請式の後、松田支部長さんや小形主任さんが一緒に台湾に渡り、自宅での安置式を行なった。自分が行ったのは御守護尊神をお持ちする時くらいだったが、前もって簡さんに、人を集めておいてお願いした。集めてくれている人達に、その場でご法の話をしていった。すると、最後に簡さんが必ず『俺の家庭を見てくれ。佼成会でこんなに救われたんだ』と力説した。お導きの最後の決め手が、簡さんが言う『バラバラだった家庭が佼成会のお蔭で円満になったんだ。あなたも入ってごらんよ』の言葉で、『そんなに言うなら、入会するかな』と、その場でお導きができていった。簡さんが『俺を信じてくれ』と導きの紙(入会用紙)を渡す。簡さんは学べば学ぶほど、証明役を果たしていった。」

簡について、松田は「簡さんという人はとてもまっすぐでひたむきな人だった。仕事や家庭のことで自分の心が定まらず、いろいろと迷っていた時に、荻野さんを通じて佼成会のご縁に触れると、脇目もふらず一心にご法を求めて精進された。性格として布教の前線に立つよりも、自分の仕事で得た経験や能力を生かした、支部法座所の運営や経営などにたけていた」と語っている⁽²⁴⁾。

鈴木はまた豊田教会と台北との関係について次のように述べている。「豊田と台北は、親子のようなもの。台北の人たちは豊田教会に泊まって本部での勧請式に出席する。豊田教会に台湾の方がみえるとみんなで『お帰りなさい』と言っていた。決して『よくいらっしました』とは言わない。勧請式の後の実習も全面的に豊田教会が担当した。『勧請式から台湾に戻って、知人に声をかけ、集めておいてくれたら、私たちが行った時に必ずお導きにつなげるので、安心していろいろな人に声をかけてほしい』と言った」。

前述したように、台北の布教を託されたのは松田と小形で、1980年代は毎月のように訪台した。松田と小形は空港からすぐに法座をしている所に連れて行

かれ、そこで導きができ、日本に帰ると総戒名を作っては、また翌月に台湾に渡り、総戒名の祀り込み、導き、手どり、法座と続いていった。それによって布教が伸び、また法座での「結び」もできた。法座は佼成会の重要な実践で、法座主を中心として会員が車座になり、日常生活の悩みを小集団の中で出し、教え照らして解決の道を学ぶ場であるが、台湾では人前で自分の悩みを話すことはしないというのに、それができたことは台北の特徴であったと思われる。

また、その当時について、鈴木は「ご命日は重視していなかった。皆、仕事がある。朝、法座所に集まり、ご供養(経典読誦)、法座、そして朝ごはんを食べるとすぐに、自宅か職場へ帰っていった。朝がゆ会ではないが、そんな名前をつけて朝を大事にしていた。当番は在家仏教教団らしく、ご供養が主体で、所謂日本のような掃除をする当番ではなかった。担当者がご宝前の飯水茶の準備をする。ノートに誰がきたかを記録し、伝達事項が終わると、鍵を閉めるという感じだった」。このことについては、清月と同じく小学校の教員で、ごく初期に入会した呉玉桂も、朝行ってお経をあげてから仕事に行ったと述べている。

(6) 簡林清月の事故死とその受けとめ方

清月は台北での布教に力があつたが、1987年11月にオートバイ事故で亡くなってしまう。清月が簡の運転するオートバイの後ろに乗っていた時、後ろから来たオートバイの人から肩にかけていたバックのひったくりに遭った。その時、バックを離せばよかったが、離さなかったことが原因で亡くなってしまったのである。清月が突然亡くなったことはショックだったが、会員の間に動揺は広がらなかったという。これについて当時豊田教会長だった鈴木は、清月の葬儀に行った時に、台北の会員に対して、「あなたたちはママ(清月に対する呼称)にととてもよくしてもらったのでしょう。ママが霊界に行って台北の会員がどうしているか心配かけないように、ママが早く成仏できるように、しっかりお導きの功德を積んで回向しよう。今度はパパ(簡)を中心にやっっていこう」と

言ったという。皆それに納得して頑張って導きをした。簡は一時落ち込んだが、むしろ清月亡き後、自ら進んで、今まで以上に精進していったので、一生懸命にやっていた人がなぜ事故で亡くなるのかというような疑問や、動揺はおきなかったと述べている⁽²⁵⁾。

なお、「佼成ニュース」1988年10月号には、1988年8月に取材した「海外の菩薩たち 台湾の布教にとりくむ」という映像での特集がある。そこでは台北法座所の様子や簡へのインタビューがのっている。台湾の伝統様式にのっとった旧盆での屋外での施餓鬼供養、台湾語での読経供養、法座所の様子やそこで月に2回無料で開かれている日本語講座の様子の動画がある。日本語教室は、日本語世代以外への佼成会の布教を意図したもので、多くの人々が学んでいた。また、簡宅に掲げられた故人となった清月の写真や、その前に集まった家族の様子、そして清月亡き後もがんばろうとする会員の姿が描かれていた。

また、長女の簡淑姿は、機関誌『躍進』1993年11月号に「台湾の青年を救える私に」というタイトルで文章を書いている。物理学者の夫の仕事の関係でニューヨーク在住だった淑姿は、突然の母の事故死に打ちひしがれた。これまで車で2時間かかるので行っていなかった佼成会のニューヨーク教会を訪ねた。信仰すれば幸せなことがたくさんくると考えていた淑姿に対して、ちょうど教会を訪問していた庭野日敬会長から、「信仰していても辛いことは起こるんだよ。一念三千なのだ」という指導を受けた。また菊地元豊田教会長からは、「お父さんの片腕となってあげなさい」との言葉をもらった。3年後の1990年、夫が台湾の研究所に戻ることにになり、台北で活動するようになった。年長者は台湾語を話す若い人は北京語を話すことから、父親に勧められて法座、研修、日本語教室などを通じて青年部の活動をするようになったのである。

(7) 本部直轄化と1991年時点の法座の様子・地域的拡大

1989年12月に豊田教会台北法座所から、本部直轄になった。菊地は「いつの

日か本部が主導を握る時がくるが、それまでは豊田がしっかりと台北を守るように」と常々言っていた。本部直轄となつてからは、豊田教会から台北に布教支援に行くことはなくなったが、団参で訪日した折には、必ず豊田教会で受け入れをした。

豊田教会の布教支援では特に法座を大切にしていたが、その支援終了2年後の1991年時点での台北での法座が取材されている。その様子をみてみよう。

『躍進』1991年10月号にはここ数年急速に布教が盛り上がっているとして台湾の三拠点の現地ルポが「台湾の人々が自ら布教する生きた教え」という全体タイトルのもとに掲載されているが、台北については、『生きた法座』が生まれつつある台北法座所」というタイトルがつけられている。台北では、4年前(1987年)から毎週土曜日の午後2時30分～5時まで、土曜法座を行っている。土曜法座は若い層の人々も集まるので、台湾語で読経供養や説法を行い、その後法座が行われている。その内容を紹介しよう。

『私は主人の浮気に悩んで佼成会に入会しました。佼成会で心を磨き、主人のよさが分かった時悩みも解決しましたが、1年後主人はガンでなくなったのです。』自分の過去をさらけだし涙ながらに懺悔説法をする王李素貴組長(61歳)。説法を聞く信者さんも真剣そのもの。王組長さんの説法を聞く簡廉征台北法座所主任(65歳)の目も涙で潤んでいた。

簡主任は事業に失敗し、奥さんと別居するという波乱万丈の人生を送ってきたが、佼成会に入会して救われた。会員さんの仏性を開こうと、自分が救われた体験をありのままに会員さんに伝えてきたが、最初は本音を言う人は少なかった。しかし、最近は簡主任の努力も実りつつある。王組長の説法が何よりもそれを物語っている。台北法座所は王組長の提供によるもので、台北法座所を陰で支えている王組長は簡主任のよき理解者の一人だ。参加者全員の法座では、『うちの嫁が私の言うことに反対ばかりするんです。息子も嫁の肩ばかり持つんですが、どうしたらいいんでしょうか』という悩みを話した。それに対

して法座の参加者が自分自身の体験を語り、湯組長の悩みに真剣に答えていった。『湯組長さん、お嫁さんを自分の娘だと思ったらどうですか。自分の娘なら辛くあたらないでしょう。親子の問題は法律でも解決できません。信仰でないとダメなんです。ぜひお嫁さんをここに連れてきてください』と最後に簡主任が結んだ」。

清月が亡くなったのは痛手だったが、豊田教会から本部直轄になるまで毎月の布教支援もあり、簡自身も覚悟を決めて布教に邁進し、また初期からの体験のある人々がおり、法座が着実に展開している様子が記されている。

台北支部には、1989年には基隆連絡所、1992年には台中連絡所が発足した。基隆は台北市から北に20キロほど離れた港町で、草創期より簡と共に活動していた陳氏が基隆の出身で、地元で積極的な導きを行い20名ほどの会員が入会した。その後、毎回台北まで出向くには運賃も時間もかかり大変だということと、基隆のサンガの人数も一定数いるということで、基隆連絡所が発足した。台中においても1989年頃、台中に居を構えていた楊美雲が簡に導かれて入会、1992年に台中連絡所が発足し、1994年からは夫の張榮松が責任者となった。

(8) 中華在家仏教立正佼成会(台湾教会)の発足と台北支部への昇格

1992年10月に中華在家仏教立正佼成会として社団法人がとれ、12月には台北中心部の官庁街にも近く、利便性のよい衡陽路にあるビルの8階に台北法座所が移転、台湾教会に同居するというかたちになった。翌1993年1月には中華在家仏教立正佼成会(台湾教会)となり、台北、台南、高屏が支部に昇格し、一つの法人になり、簡が初代理事長になった。台北支部のもと基隆法座所と台中法座所が所属した。

1993年1月に台湾教会の入仏式が行われたが、同年、1993年8月13日号と8月20日号の佼成新聞には「サンガを訪ねて台湾編 台北支部(上)新入会員即布教者 支部活動活性化の原動力へ」、「(下)若い世代へ信仰を継承 偏見や言語

の壁を取り除き」と取材に基づいた記事が掲載されている。(上)では、毎週「土曜の集い」で読経供養、説法、ふれあい法座が開かれ、50人を超える参加者がいる。そこでは法座での内容、新入会員が即布教者となっていく姿に言及されている。

(下)では、「若い世代に信仰を継承」という見出しで、当時の支部会員世帯数は650を超すこと、主な会員は日本語を話し理解できる年代(60歳以上)が多く、若い世代に信仰がつかない原因の一つに言語の壁があり、同じ台湾国民でも台湾語を話す世代(60歳以上)と中国語(北京語)を話す世代がおり、青年は中国語世代のため日本語はもとより、台湾語による研修や法座は理解できない。しかし、1992年から簡の長女の淑姿(41歳)と次女の妙芳(36歳)姉妹が青年部リーダーになってから、今年(1993年)1月からは毎月2回日曜日に「青年の集い」を開催、20～30名集まるようになったという⁽²⁶⁾。

(9) 教会道場の移転と台北支部の活動

1993年から中華在家仏教立正佼成会(台湾教会)が台北支部と同じ場所におかれていたことは先述のとおりである。1993年には、本部大聖堂の本尊に似た極彩色本尊が安置された。台湾の伝統に即した観世音菩薩と光明燈のある部屋があり、毎月25日を観世音菩薩命日として、本部の命日に追加して行っている。1999年には第3章で言及したように、中華在家仏教立正佼成会という法人格を解散し、3支部が別々の法人格をもつようになり、台北は「社団法人在家仏教立正佼成会」となった。

2002年8月には同じビルの8階から4階に移転した。前者は賃貸物件で本部が賃貸費用を出しており、これが他支部との関係で何かとトラブルのもとになっていた。後者は日本の本部からの資金援助と会員の寄付によって購入した物件である。

年中行事としては日本の佼成会が行っている行事の他に、清明節、端午節、



写真9 台北教会の観音像前での礼拝の様子(2012年、渡辺撮影)

台北教会には、台湾で信仰されている観世音菩薩の部屋がある。右側の壁一面にみえるのは光明燈。左右ともにある。



写真10 台北教会での盂蘭盆会・中元節の読経供養(2015年、台北教会提供)

中元節、中秋節、重陽節などの中国の伝統行事も行っている。中元節の場合、道場のあるマンションの前に机をならべて、諸精霊のための飲食物を並べ、紙銭をたいたりしており、これは台湾の伝統的なやり方と同じである⁽²⁷⁾。

2004年10月から布教用に『佼成生活』という6頁ほどの冊子を季刊で刊行したが、2006年1月で終刊した。

活動としてはコーラスや生け花教室を開催した。特にコーラスでは合唱団をつくるほど熱心で、1994年には本部普門館での合唱会に参加、それ以後、本部団参の時にコーラスを披露した。なお、合唱団は2011年に終了した。理由は、参加している会員の高齢化のために学習が難しくなったことと講師謝礼の値上げを要求されていたためである。生け花教室を開催したのは短期間だった。

本部団参は旅行の要素を付け加える場合もあり、楽しさをもたらすもので、また本部の宿泊施設での宿泊で費用をおさえることができるため、団参をきっかけに会員になる人もいた。2006年の世界サンガ開祖生誕100周年記念団参には117名が参加した。団参で行った際の日本の教会で受け入れは豊田教会が担当した。菊地は1998年に亡くなったが、教会長がかわってもそのかわりは継続された。

青年部活動として1994年には台湾教会から41名、そのうち台北支部からは30名の青年部員が訪日し、法華経信仰の聖地である七面山登山と青梅鍊成(青梅には佼成会の鍊成道場がある)を行った。台北での青年部の活動としては、1997年3月に法統継承修行としての課外活動、5月には青年の日として公園の清掃に40名の青年部員が参加した。7月には青年部が本部研修に参加した。1998年にも3月に青年部課外修行、5月に青年の日の青年部課外活動を行った。2001年には11月に青年部員が中正紀念館広場で布教宣伝をした。2004年7月には青年部が山で課外教育活動を行った。2009年8月には日本の本部での青年部鍊成活動に7名が参加した。2010年には青年1名が日本の本部での幹部研修に参加した。2015年には本部から3名の講師が派遣されて台湾青年部鍊成会が行

台湾における立正佼成会の展開



写真11 台北支部コーラス部の発表風景
(1996年頃、『佼成 中文版雑誌』第13期掲載写真，1996年6月発行)



写真12 母の日に開催されたコーラス部の歌を聞く聴衆
(1996年頃、『佼成 中文版雑誌』第13期掲載写真，1996年6月発行)

われた、参加者は29名である。

このように青年部活動は、1996年に簡淑姿がアメリカに戻ったこともあるが、1998年までは比較的活発に行われたものの、次第に頻度が減少し、2008年に台北教会となつてからは、本部主導が高まり、(もしくは教会の体力がなくなり)、2009年以降は日本の本部での青年育成プログラムに参加したり、2015年には講師が日本から派遣されての青年部の研修となった。

(10) 台北教会の設立

第3章で先述したように、2008年12月には台湾教会を台北教会と台南教会に分割し、現地の台湾人が教会長になった。台北では、2007年5月に簡汝廉(享年80歳)が亡くなった。長本教会長の時代(2005年11月)に、これまでは支部長と理事長が兼任であったのが、どちらかを選ぶように言われ、簡は理事長の方を選び、支部長に次女の簡妙芳(1956年生)が就任していた。

妙芳は、5人きょうだいの四番目の次女である。母の清月が亡くなってから、簡は仕事よりも布教に重心をおき、法に専念しはじめると妙芳はそのサポートをするために道場に通り、総務の仕事を手伝うようになった。その後青年部長、支部長の役をしてきたが、本当に教えを理解していたわけではなく、父の手伝いをしたいということだったという。

父の簡が亡くなってまもなくして、齋藤教会長から、これからは日本人ではなく、台湾人に教会長になってほしいので、推薦したいと言われた。「有難い」という思いではなく、責任感から役を受けたという。妙芳はその時52歳だった。

妙芳は2016年2月に本部大聖堂で体験説法をしているが、その中で教会長に就任した時の古参信者との葛藤について述べている。

「教会長のお役を拝命した当初、次々と様々なお試しを頂戴しました。ある時60～70人が参加している法座での結びの時に、一人の先輩会員さんから『あなたのような若輩者に結ぶ資格はないよ』と言われ、その場にいた人たちは私

台湾における立正佼成会の展開



写真13 台湾教会青年部による日本の七面山登山の際の「肝心坊」での昼食風景
(1994年、『佼成 中文版雑誌』第15期掲載写真, 1996年8月発行)
青年部の七面山登山, 青梅錬成の時期については1994年と特定。



写真14 台湾教会青年部青梅錬成会での太鼓の叩き方練習風景
(1994年、『佼成 中文版雑誌』第15期掲載写真, 1996年8月発行)

にでしゃばるなど言わんばかりに、その先輩に追随したのです。このような屈辱や悔しさを受け……当時はとても辛く、涙を吞んで堪えていました。佼成会をやめて気楽な生活を送りたい。元々父親の手伝いをするために始めたのだし、もうその父もいないから離れてもよいんだと考え、次の日曜日に教会を去ろうと荷物の整理を始めました。……教会を去ろうと決めていた日曜日の前日の朝、ふとご宝前の両横に書かれてある『我が此の土は安穩にして、天人常に充滿せり』の言葉を目にしました。その時私の心は温かさに包まれ、仏さまから『信仰心を保ち、正しいことを行えば、必ずご守護いただけるよ』と教えて頂いたように感じました。『これが私の進む道だ』と心が定まりました。』⁽²⁸⁾

妙芳はこの体験を筆者に語った時にも日本語で「先輩(センパイ)」という言葉を用いていたが、先輩は彼らの自称だった。先輩幹部から試され、なぜこのような苦しい目にあわなければならないのか、と思ったという。1年目は説法しても「あんたの言うことは聞かないよ」と言われ、大法座でも「誰だと思っているんだ、先輩だよ」と言われたという。妙芳がいうには、先輩たちの修行スタイルが今とは違う方便時代の修行で、布施をどれだけ多く納められるかで、財施についてはしのぎをけずるくらいだったという。

これらの出来事は、現地の教会長として突出する人がいない場合、古参の「先輩」に対して父親についてやっていただけの「若輩者」が受け入れられにくい難しさを示している。しかしまた、教会の構成メンバーの多くは高齢者であり、信仰継承や若い世代の育成がなかなか実らなかった状況もある。台北教会では火曜日から日曜日までの6日間道場当番があり、そこでは6組にわけられており、各組に主任がいる。組の人々は担当の当番の曜日には来るものの、毎月の命日参拝は少ない(独自の毎月25日にある観世音菩薩命日のみ他よりも多い)。曜日の当番の参加者も高齢化し、人数も減少している。これを担っているのも高齢会員で、妙芳は「まるで老人ホームのよう」とも語る。

光明燈の点灯式、閉光式は、1年で最も布施が集まる行事として大きな収入

になっている。妙芳はさまざまな工夫をして、建て直しをはかっている。2012年に調査に訪れた際には、教会勸請本尊(単体の総戒名にかわって授与されるようになった、絵像の本尊、総戒名、開祖・脇祖の法号、宅地因縁がセットになったもので、額装本尊ともいわれる)の安置を推進することによって、世代交代を図ろうとしていたが、総戒名や法号に対する抵抗から、その後も進んでいない。

また、基隆には1989年に、台中には1992年に連絡所を開所し、教会昇格とともに支部になったが、リーダーの不在と会員の高齢化により、基隆支部は2013年に、台中支部は2017年に閉鎖された。2015年に台北教会は30周年式典を行ったが、豊田教会から30名が来台し、それに参加した。今日では教会長のほか、理事長、支部長という重要な役職も妙芳の兄が就任し、簡一族が担っている状況になった。いずれにしても台北教会は転換期にある。

5 台南教会の展開

(1) 初期布教の展開

莊金泳の入会とその経緯

台南教会は秋田県の大館教会の系統である。1974年5月に秋田県にある藤吉銘木株式会社と台南の大成林業公司(木材店)が合作して天井板を作成することになり、日本の会社から技術指導員として大槻定央(男、1917-1992)が派遣された⁽²⁹⁾。大成林業公司を経営していたのが、莊金泳(男、1927-2012、選名:金永)である。莊は親から受け継いだ百貨店の経営も行っており、そのほかいくつかの会社を経営し、経済的には富裕層に属していた。社会的活動としては台南青年会議の会長、台南ロータリークラブの会長並びに国際ロータリークラブ(国際的な社会奉仕連合団体)のガバナーになった経験もあった。

佼成新聞の1996年7月24日号に掲載された「台湾教会 莊金泳さん(68歳)の体験から」という記事と、莊が1992年6月15日に本部大聖堂で行った体験説法

に、大槻と莊との出会いについて言及されているので、そこからみてみよう。大槻は腰が低く、誰にでも自分から挨拶する人で、また、莊が何よりも驚いたのは、大槻が休み時間に黙々とトイレ掃除をしていたことだった。その時は変わった人だと思っていたが、あとになってわかったことだが、それは心の垢をとる修行だった。大槻は柔和で、人に好かれるタイプの人だった。

翌1975年9月に、莊は商用で秋田県大館市に行き、大槻の所属する立正佼成会大館教会を参拝した。大館教会の会員の人たちは皆大槻と同様に心の温かい人だったという。また、大槻に連れられ、東京の本部の大聖堂にも参拝した。そして、大槻に勧められて莊は佼成会に入会(大館教会東支部)し、台湾に帰国してから、佼成会のことを話して友人・知人を導いた。最初の会員は莊の友人2人(男)、大槻の泊まったホテルの従業員の郭雪桜(女)、日本料理屋の邱節子(女、1926-2018、日本人、台湾名:邱陳節、選名:優枝)、写真の現像で知り合ったカメラ店主の蔡森煌(男)であった。

1976年4月には大館教会から金今淑江教会長をはじめとして5人が台南を訪れ、莊も含め六家の総戒名と宅地因縁の祀り込みがされた。

初期の活動状況

莊宅での初期の活動状況について、邱節子(邱陳節)による2013年4月8日の台南教会での降誕会式典での体験説法「佼成会が変えてくれた人生」(SHANZAI Vol.93, 2013年6月号:6-7⁽³⁰⁾)で言及されているので参照しよう。邱は日本人で日本料理の店を営んでおり、そこに大槻がよく寿司を食べに来た⁽³¹⁾。「大槻さんは機関誌の『佼成』を持ってきては見せ、佼成会への入会を勧めた。当初は仕事もあり余裕もなく行くことはなかったが、それから1年後に入会した。毎月1日と15日に日本語でご供養(経典読誦)をしていた。それに引き込まれるように、莊宅の近所に住む鄭旺牛さんも入会した。当時は日本語でご供養をしているところは少なく、日本語教育を受けた世代の人が多数入会

するようになり、会員数は30～40名になった。大館教会からも布教に来ていた」と当時の状況を述べている。この日本語での読経供養にひかれて、入会したのは鄭旺牛(男、1913生)で、のちに『台南佼成』の表紙絵を描いた人である。

1979年1月5日号の佼成新聞には「教えは世界」という特集で、「悪条件克服し信心を深める」というタイトルで、台南のことにも言及されている。「台南市(人口約55万人)には大館教会台南地区会員として11世帯が班づくりを行っている。毎月15日の本部命日に午前7時から読経供養を行い、このあと荘金泳さんを中心に、法座や庭野会長のご著書をテキストにした法門研修会を開いている。こうした中で救われた会員も多く、蔡森煌さんは家庭不和と娘の病気に悩んでいたが、一昨年(1977年)本部から西川教務部長が訪台した時に自ら進んで指導を受け、3カ月間三部経の読誦修行を続けた。暗かった家庭も明るくなり、今班長補佐として、毎月の地区行事計画を立てたり、寺社を訪問して佼成会との交流を図っている。同地区会員の最大の願いは本部参拝と御本尊を拝受したいということだ。ともかく、もっと教義の研さんに努めたいという求道心が強く、その心が『導きをしよう』という班スローガンにも表れている。」

1979年8月17日号の佼成新聞に、「夢にまで見た本部参拝」というタイトルで蔡森煌(51歳、カメラ店経営)の記事がのっており、ここにも当時の状況が語られている。「台南市には現在11世帯の会員(大館教会所属)がおり、毎月15日の釈迦牟尼仏ご命日には各家持ち回りで読経修行や法座修行を行っている。国の事情で集会や郵便物に対する規制もあったが、大概さんや大館教会会員の懸命な後押しで、これまで修行を続けてきた。現在では蔡さん宅などに、『新訳法華三部経全十巻』や機関紙誌などがそろえられ、会員たちは持ち回りで読みあっている」と当時の状況が語られている。このように、集会や出版物を手に入れにくい状況の中で、会員宅の持ち回りで集まっていたが、1979年12月に荘宅に本尊が勧請されたので、樹林街にある荘の家が固定の集会所になった。毎日午前7時30分から読経供養を行った。

(2) 大館教会台南法座所の設立

法座所の設立・団参・本部からの講師派遣・本部研修

1980年に中国仏教会と佼成会の親善交流に関する同意書が調印された。1981年10月には中国仏教会主催の第一回仏教ゼミナールが開催(この時は豊田教会の人々が参加)、翌1982年11月19日にも台北で第二回ゼミナールが開催され、国際室員2名のほか大館教会から21名、そして荘も参加した。21日には、大館教会は台南で現地会員との交流法座をもった。この時、大館教会台南法座所設立が合意され、翌1983年1月1日付で、大館教会石山教会長より荘が主任の辞令を受け、樹林街の荘の自宅に大館教会台南法座所が正式に発足した⁽³²⁾。当時の会員は80名で、4組に編成した。邱節子は第一組長になった。同年11月には邱節子など3家が本尊を勧請した。

1985年3月には本部創立35周年のため65名が記念団参した。同年9月には本部から講師が派遣され、佼成会の創立の意義と目的、『法華經の新しい解釈』(庭野日敬著)、仏教の根本義の研修会を行った。また、1986年の3月と8月には、現地の人間による現地布教の体制の確立を目的として本部で行われた海外幹部教育研修会(招聘教育、タイ・台湾・韓国)に荘が参加し、教義、儀式、布教の三点について研修を受けた。同年10月には、荘金泳、邱節子、蔡森煌家に守護神(御守護尊神)が勧請された。

祈願供養の開始

台南における佼成会の布教拡大の一要因になったのが、1986年に、はじめて、会員の病氣平癒祈願の供養を行ったことである。重病で入院した会員は奇跡的に全快して退院し、その後、病氣平癒祈願供養、入学試験の合格祈願供養が行われるようになり、多くの会員が「御守護を頂戴した証明役」として導きをし、新会員が多数増加した。1988年には230世帯になり、同年4月27日～5月14日

に行われた創立50周年記念団参には台南から48名の会員が参加、1991年の世界サンガ結集団参には86名が参加した。

莊が語る自分自身の変化

台南布教の一粒種である莊の人となりについては、やさしいが厳しいところがある、自分主義というか自分がよいと思ったらパツとする人、ワンマン社長、金持ち、という会員の話がある。莊自身は佼成会に入会して自己中心だった自分の変化を感じている。莊の大聖堂での体験説法の原稿から、自分自身の変化についてどのように認知しているかをみてみよう。「佼成会の縁にふれるまでは私の幸福は皆私が努力して得たものだと思っていました。取引先に対しては買ってやっている、社員に対しても厳しく、自分の利益だけを主張してきたので、対人関係は悪く、人に好かれる方ではなかった。……今までの私の幸福は人様のお蔭様であると考えようになりましたので、取引先にも柔和な態度で接するようになり、また社員にも進んで挨拶し、ありがとう、ご苦労様というようになりましたので、社内が明るくなりました。自己主義であった心が変わると顔色も変わり、皆さまから好かれるようになりました」と述べている。

佼成会と日本語世代

莊は体験説法の中で、「世間の人から佼成会の会員は和やかな相をしていると言われ、または金持ち人の会とも言われている」と述べる。佼成会に入会したのは、日本語世代といわれる、戦前に日本式の教育を受け、日本語に堪能で、日本的なものに対して安らぎを感じる人々だった。そして、これらの人々は資産のある裕福な人が多かったとのことである。当時は戒厳令下(1987年解除)であり、日本語を話すことや、集会、日本からの出版物の流入に対しては規制があった。

初期に入会した人で存命の人は少ないが、具体的にどのような状況であっ

たのかについて、台南法座所が設置された1983年に入会した郭麗嬪(女、1931生)からの聞き取りと体験説法「私の入会と活動の履歴」(Living the Lotus, vol.114, 2015年3月号:6-7)から、台南の佼成会の状況の推移をみていくことにする。1983年に大館教会から2名の支部長が来た時に、邱節子が2名の支部長を郭の叔母(日本留学経験のある医師の叔父の妻で日本人)の家に招いて法座を行った。そこで教えについての話を聞き入会した。入会した頃は大館教会台南法座所(荘の自宅)になった年であるが、そこでは同じ年ごろの50歳ぐらいの人が集まっていた。20~30名集まり、男性もけっこういた。この年代は日本語が話せるのでお経を日本語であげていた。法座所に集まって日本語が話せるのが楽しみだった。また日本から来た日本人の日本語を聞くことができるのも魅力だったという。

2017年に聞き取り調査を行った陳寶嬌(女、1925生)は、「荘さんの自宅の真向かいに住んでいて、荘宅で集まりがあって皆日本語で話していた。そして日本語のお経をあげていた。日本の教育を受けたので日本語に慣れているし、皆で日本語で話をする和幸福だった」と語っている。なお、陳は台南第二高等女学校卒である⁽³³⁾。

このころは男性会員も多くいた。彼らは日本語能力が高い人々であった。その後、男性が主体となり、文書布教が推進されていくことになる。そこでの視点は、日本語世代は年齢も高くなり、いずれ行き詰るので、若年の層に中国語で教えを伝えようとしたものである。

(3) 文書布教の推進

『台南佼成』から『中華佼成』へ

1988年6月には月刊誌の中国語による『台南佼成』が創刊された⁽³⁴⁾。これは第1期~第14期(期は日本語だと号にあたる)、1989年7月までである。そして、1989年9月からは『中華佼成』と誌名を変更し、月刊で1994年12月(第63期)

まで発行された。そして1995年6月(第Ⅰ期)～1999年2月(第35期)まで、『佼成 中文版雑誌』と誌名を変更し、定期的に発行された⁽³⁵⁾。

前述したように、1988年8月に、台南、台北、高雄、屏東から45名の幹部が集まり、第一回台湾幹部研修会が開かれた。ここで初めて各拠点が一堂に会したと思われる。「佼成ニュース」1988年10月号の動画には第1回台湾幹部研修会の様子が出ているが、日本からの講師は日本語で教えや実践について説き、台湾の幹部会員は日本語で理解している。しかし、そこでは世代の移り変わりの中で、日本語世代を超えて佼成会の教えをどう伝えるか、言葉や習慣の違いや伝統的仏教になじんだ人々にどのように佼成会の教えを伝えるかについても論議された。『台南佼成』はこの研修会に先立つ2カ月前に創刊号が発刊されているが、この研修会をきっかけに、台南法座所が出版していた『台南佼成』を『中華佼成』とし、台南以外にも広げていくことを合意するきっかけになったのではないかと推測される。『中華佼成』の奥付には、台南法座所、台北法座所、高雄法座所、屏東法座所の住所が記載され、無料配布であること、欲しい人は上記4か所の法座所に連絡されたしと記されている。発行は台南法座所で、台南法座所に中華佼成基金を設置し、毎月の寄付者と寄付金額が芳名録として掲載されている。最も大口の寄付者は荘であるが、創刊号には100名以上の寄付者の氏名がある。収支報告書も書いてある。内容としては日本の『佼成』『躍進』『佼成新聞』からの引用で、どれを掲載するか検討の上、翻訳したものと思われる。たとえば1989年9月号に1989年7月の佼成新聞の記事が出ているので、翻訳のスピードはかなり速い。

文書布教の中心になったのは田宏元(1931-2004)で銀行員である。『躍進』1989年12月号には田が執筆した「仏縁にふれた恩返しを布教文書の翻訳で」というタイトルの信仰体験がのっており、肩書は台南法座所青年組講師とある。田は1988年4月に入会したが、きっかけは女性会員がオフィスで『佼成新聞』『佼成』『躍進』『マミール』を配って導きをしており、機関紙誌をもらって読んだ

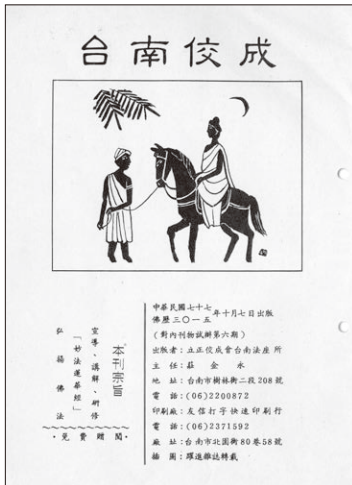


写真15 『台南佼成』表紙
(1988年10月7日発行：立正佼成会台南法座所)



写真16 『中華佼成』第4期表紙
(1989年12月発行：中華佼成雜誌社)



写真17 『佼成 中文版雜誌』第1期表紙
(1995年6月発行：佼成中文版雜誌社)
同年4月に行われた第2回世界僧伽結集団参の時の写真が表紙に使われている。背後にみえるのは大聖堂。

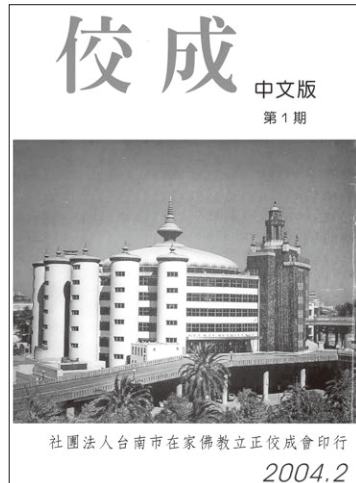


写真18 『佼成 中文版』第1期表紙
(2004年2月発行：社團法人台南市在家仏教立正佼成会)

ところ、その教義、世界平和への態度、一食募金活動などの菩薩行に感銘を受け、入会したのだという。入会后1年間、法座所に通い、法華経を読誦し、法座修行をし、7名を導いた。そして現在は妻とともに青年部会員に日本語の指導を行っている。田は、「私が一番心配するのはあと10年も経てば、台湾における法の後継者が絶えてしまうのではないか、私は文書布教のおかげで仏縁にふれることができた、そうだ文書布教でいこうと考えた末に決心した。そこで翻訳を買って出た。日本語を知らない青年部員と信者のためにまず佼成会布教本部編の『經典の解釈』を翻訳、2カ月間没頭し、100枚、字数5万字を完成した」とある。このあと『中華佼成』の中心人物になっていくのである。

法座所の永福路への移転と活動状況

『中華佼成』には、各法座所の活動についても記載されている。1989年9月の『中華佼成』創刊号には、台南法座所の活動として、読経供養：毎日朝7時30分、例会：1日15日(1組、2組、3組)、10日28日(4組、5組、6組)、青年組：毎週水曜日、夜7時から読経供養と日本語教室、があげられている。なお例会と書いてあるが、日本の教会での命日と同じ日程である。樹林街の荘の自宅では会員が多くなって入りきれなくなり、例会(命日)参加者を組によって分割している。また、青年組では日本語教室が開かれていることがわかる。会員が増えて手狭になったので、法座所を拡大するため、1990年8月に永福路(会員所有のビルの3階、広さ約25坪)に移転した。

1991年時点の台南法座所：世代交代の切り札としての日本語講座と『中華佼成』

永福路に法座所が移転し、広くなったので会員にとっての拠点施設の居心地はアップされた。1991年10月号の『躍進』に1991年当時の台南法座所の様子が出ているので、みてみよう。この時期には台湾での布教の盛り上がり注目した佼成出版の編集部が現地ルポを行っている。

台南法座所では毎朝の7時30分からの読経供養には30～40人の会員が参加し、その後法座や説法が行われている。法座所の管理は当番が行っている。台南法座所の持ち味として。サンガの温かいふれあい、親切で穏やかな雰囲気あげられている。また荘は「ともかく人が楽しく集まれる場所づくりに気を使った」と述べている。

荘は「現在おおざっぱに分けて台湾には三つの世代がある。日本の教育を受けた60代以上の世代、台湾語を話す40～50代の人、そして国語である北京語の教育を受けてきた30代以下の若者。これからは日本語が分からない世代にも教える伝えていかなければならない」と述べる。そこで青年部を対象とした「日本語講座」が2年前(1989年)から開催され、『中華佼成』が出版されている。日本語講座の講師は田宏元(60歳)と妻の王采紅(58歳)である。

日本語講座では青年から50代までの年齢層がいるが、青年の入会と育成に着目しているので、北京語による經典読誦が行われる。そして、田によると「ここでは単に日本語だけを教える場ではなく、法華經的なものの見方や、人と人とのコミュニケーションを日本語の勉強を通してする場」であるという。

のちに二代目台南教会長になった蔡麗金(女、1948生)は、1989年に姉の紹介によって日本語教室をきっかけに入会した。信仰をしたくてというより、カラオケを歌うために日本語が習いたかったのである。当時は日本語教室への入会の条件が佼成会への入会で、日本語教室では読経供養(經典読誦)をしてからクラスが始まった。会員が日本語の先生で、20名くらいの生徒がいたという。また蔡が入会したころは青年部があり、蔡は青年部員として活動した。

『中華佼成』の発行人として名前が記載されている荘金松(63歳)は、「日本語が読み書きできる世代は年々少なくなっている。佼成会の教えを台湾に根付かせるためには、漢字を使わないとだめだ。漢字なら台湾語を使う中年層でも北京語を使う若者でも読める」と語る。『中華佼成』創刊当初の発行部数は200部だったが、1991年時点では650部が発行されている。編集スタッフは7名である。

これは寄付によって作成されている。

(4) 台湾教会台南支部への昇格

1993年時点の台南支部の状況

1993年は、前年に在家仏教中華立正佼成会として法人格が取得できたことで、台湾教会が設立され、台南法座所は台南支部に昇格し、莊が初代支部長に任命された年である⁽³⁶⁾。

この時には「サンガを訪ねて 台湾編」が佼成新聞で特集記事が組まれている。台南支部については、1993年8月27日号で(上)台南支部として「地域に根ざして 先祖供養通して広がる法の輪」という記事がある。会員数は890世帯と台湾教会での最大の支部であること、布教活動は現地の宗教事情や文化を受け入れながら展開されていること、祖先崇拜の観念が根強いだけに、まず先祖供養の意義を説き、次に毎朝、法座所で行われる読経供養に誘う。その中から入会する会員が多い。法座所での読経供養は朝8時から始まる。導師などの役は、曜日によって7組に分かれた法座当番が担当する。中国語での經典読誦が終わると教学研修、法座と続く。高齢者が多いが、最近、青年層の姿も目立つようになった。家庭で教えを息子夫婦や兄弟に対して話し、家族で法座所に参拝する会員が増えたからだ、という内容が記されている。

伸びる文書布教『中華佼成』

同年9月3日号の(下)では、「伸びる文書布教 人の生きる道平易に説く」というタイトルで、『中華佼成』に言及されている。1993年の発行部数は約1200部と1991年時点の数の約2倍である。編集スタッフは10名(3名増)、そこにはアメリカ・ロサンゼルスからの礼状にも言及されているが、配布先は、台湾国内だけではなく、アメリカや香港などにも及んでいる。内容は機関紙誌からの庭野開祖、庭野会長の法話や教学などを抜粋、編集スタッフが中国語に翻

訳し掲載している。毎月編集会議を開き、内容を検討し、各スタッフが翻訳する箇所を打ち合わせ、翻訳のために深夜まで自宅に机に向かうことも少なくなる。「下がる修行」や「お通し」といった佼成会用語をわかりやすく、中国語にどう表現していくか、毎回頭を悩ましていたという。

このように、台南では文書布教が盛んで、『中華佼成』は台南支部のスタッフによってつくられ、作成費用、すなわち基金への寄付もほぼ台南でまかされた。1995年6月(第1期)からは誌名を『佼成 中文版雑誌』に変更し、1999年2月(第35期)まで継続して発行された⁽³⁷⁾。

1999～2000年にかけては先述したように、台北、台南、高屏が個々別々の法人人格を取得し、在家仏教中華立正佼成会の法人を解散するので、『中華佼成』から『佼成 中文版雑誌』までが活力のあった時期だと思われる。奥付に台北支部、基隆連絡所、台中連絡所、台南支部、台南支部北区連絡所、高屏支部、高雄連絡所の住所が記載されている。

(5) 公園南路時代の活動：最も活気のあった時期

永福路から公園南路への移転

1994年6月に台南支部北区連絡所(公園南路39号4階)が設立された。永福路と併存していた時期をへて、支部道場(法座所)が1997年1月に永福路から公園南路に移転、同年4月に庭野日鑛会長を迎えて入仏式が行われた。公園南路の道場は約75坪で、永福路よりも広がった。また、公園南路の道場は台南駅から徒歩10分のところにあって、集まりやすく、きわめて利便性が高かった。7階建ての台南市北門区活動センター(台南市所有物件)の4階にあり、ワンフロアを借り切ったものだった。永福路と公園南路は併存して集まりが行われた時期がある⁽³⁸⁾。

台南支部の活動

1996年10月の『佼成 中文版雑誌』では、台南支部での活動が記され、「善男



写真19 台南支部・永福路法座所での法座の様子
(1995年頃、『佼成 中文版雑誌』第7期掲載写真, 1995年12月10日発行)



写真20 台南支部・公園南路法座所での莊支部長による法華經講座
(1995年頃、『佼成 中文版雑誌』第7期掲載写真, 1995年12月10日発行)
宝前の中央は絵像の軸装本尊。

子善女人こぞって参加され、共に仏道を修行されることを大歓迎致します」と参加をよびかけている。その内容は、①妙法蓮華經の研修(場所：永福路)、②読經供養と法会(台湾語の法華經読誦)、時間：毎日午前8時～10時、場所1：台南支部(永福路)・場所2：台南支部北区連絡所(公園南路)、③読經供養と法会(国語の法華經読誦)、時間：毎週水曜日夜7時～9時、場所：台南支部(永福路)、④読經供養と法会(国語の法華經読誦 婦人部限定)、時間：毎週火曜日 午後2時～4時、場所：台南支部(永福路)である。この時には永福路と公園南路の二つの場所で活動が行われていた。

1999年2月の『佼成 中文版雑誌』では、①台湾語法華經読誦 時間：毎日午前8時～10時 場所：台南支部(公園南路)、②国語による法華經読誦(婦人部)、時間：毎週火曜日午後2時～4時、場所：台南支部(公園南路)、④国語による法華經読誦(青年部)、時間：毎週水曜日午後7時～9時、場所：台南支部(公園南路)とある。毎日の読經供養は主として年輩者を中心に行い、婦人部は平日の週1回、集まりやすい午後の時間に、青年部は、平日の夜に開かれた。

日本語教室のほか、生け花教室もあった。また、日本の本部への団参も入会と結びついた。婦人部や青年部は会員の子ども(二代目)というよりも、日本語や日本に関心のある人が多かった。日本語教室を開くことの一つの目的は未会員に佼成会を宣伝し、知ってもらうことで、日本語教室で学ぶには佼成会に入会することが条件だった。日本語教室が始まる前に經典読誦し、それから教室を開始した。

台南では1992年7月から日本語による經典読誦を一切やめ、台湾語に、そして青年や若手の婦人層には国語すなわち北京語に切り替えている⁽³⁹⁾。これは日本語教育を受けた世代が高齢化しつつあり、教線を伸ばすためには、日本語から台湾語へ、そして青年層や若い婦人層には北京語へと切り替えが考えられている。また積極的な文書布教や導きで、会員数も増えていった。布教に際して文書布教とともに、日本語教室の果たしている役割は大きかった。日本語教

室は無料だが、佼成会の入会が前提条件であった。そこでは日本語のみならず、佼成会の教えも伝えられた。

婦人部の結成

中国語での佼成誌の発行については、編集スタッフとして男性が中心に行われた。そこではいずれ起きる世代交代を意識し、青年と若手の婦人層を意識していた。日本語から台湾語へ經典読誦が切替わるとともに、前述したように青年部と婦人部には国語すなわち北京語での読誦の機会を別途もうけている。經典読誦に関しては、樹林街の法座所では日本語、永福路になってからは台湾語、そして青年、若手婦人部に向けては北京語になり、公園南路でも同様である。拠点施設の拡大は収容人数との関係もあるので、教勢が拡大していったことを示すものでもある。先述の「サンガを訪ねて台湾編 台南支部(上)」の中で、婦人組(婦人部)について言及されているが、1992年(昨年)春に発足し、毎週月曜日に、北京語での読経供養後、説法、法座が行われると書かれている。

楽しかった日々

永福路や公園南路の法座所には、当番の人以外にも田宏元(1931-2004)、廖坤海(1926生)、柯春吉(1926-2017)といった男性会員(退職者)がほぼ毎日のように来ていた。田と廖は中国語の佼成誌に携わった人で、柯はのちに理事長に就任した人である。そのころは人がたくさんいて、とても賑やかだった。永福路や公園南路の時は楽しかったという声が複数の女性たちから聞かれた。彼女たちは現在では60~70代という年齢になっているが、当時の婦人部に属していた。特に公園南路の時は楽しかったと語る。婦人部では毎週火曜日の午後2時に集まり、読経供養の後、法座をした。法座といっても、お茶を飲みながらお菓子を食べながらの交流のイメージだった。1ヵ月に一度、誕生会も開かれていた。

当時でも会員の多くを占めていたのは高齢になった女性会員だが、1954年生まれの二代目の女性会員は母に聞いた話として次のようなエピソードを紹介してくれた。「公園南路の法座所は場所が広かったため、医療器具の会社が小型トラックに電気治療椅子(電気マッサージ機)を載せて運び、会員さんたちに座って治療を行うように貸し出していた。購入前のお試しでのものである。電気治療椅子に座れば血液の循環が良くなり筋肉痛を防ぎ、ボケ防止になると言われていたので、ある程度以上の高齢者たちは競って座っていた。一回20分から30分だったが、皆さんは順番に座っていた。会員さん達の反応もとてもよかったので、お金を出し合って1台購入し、当番の日になると互いに電話をかけ合い、連絡をしていた。『明日は佼成会に行ってお経をあげて電気治療椅子に座ろうよ』と。時には、彼女たちは教会が終わると、ご飯を食べに行ったり、温泉に行ったりしていた。彼女たちが楽しんでいる多くの写真を見ると、佼成会が母に信仰と楽しいひと時を提供してくれることにとても感謝している様子がわかる。」

雰囲気は温かく、親切な人々の集まりだったことは、今回資料の中から発見された1995年の開祖卒寿記念団参時に本部側が行った信仰体験アンケート調査(自由回答)の中からもうかがえる。台南からは30名がアンケートに答えている。回答者の生年は1914年から1934年(1995年当時61歳～81歳)、性別では男6名、女24名、入会年は1970年代6名、1980年代21名、1990年代3名である。日本語で記入しているので、日本語世代の人がほとんどだが、男性の場合は法華経や教えに魅力を感じてという理由、女性の場合は夫が亡くなった後の喪失感や寂しさ、悲しみが、佼成会に入会して落ち着いたこと、会員がみな親切、感じがよい、友達ができた、供養ができるなどがあがっている。やはり、当時の台南の佼成会は温かな空間を形成していたことが推測される。

公園南路は人が集まりやすい立地であり、性別・世代にかかわらず、さまざまな人々にとって、居心地のよい空間を形作っていたようである。公園南路の

時が最も佼成会が盛んだった。『中華佼成』や『佼成 中文版雑誌』の作成に使命感をもって取り組んだ人々がおり、また、日本語世代にとって日本語でおしゃべりができる場としての魅力があった。中心になる年代がまださほど高齢化しておらず、そして日本語世代の人々は資産があり、布施も活発に行っていた。さらに、婦人部、青年部ができ、主体は日本語世代にしても新しい若い世代がかかわっていたことも活気を生んだと思われる。

日本語をしゃべれる、日本の本を読めるということへの魅力から入会した世代から、日本語教室、生け花、書道などのサークル活動、中国語での雑誌の刊行、(若い婦人が増えたので)台湾語での經典の作成、読経供養へのいざない、青年層への働きかけなど、布教への意識があったことがうかがわせる。

庭野日鑛会長を迎えての入仏式

公園南路の法座所は1994年からの永福路法座所との併存をへて、1997年1月には台南支部が永福路から公園南路に移転した。同年4月25日に庭野日鑛会長を迎えて本尊像の安置式が行われた。

1997年5月2日号の佼成新聞には次のように書かれている。「式典には政財界からの来賓をはじめ支部会員350人が参列。法座席に入りきれない会員たちは、1、2階の特設会場に分散し、テレビのモニターを見つめ、御本尊除幕の時を待った。ご宝前のカーテンが明けられると、深紅の壁を背に、金色に輝く御本尊像が姿を現した。厳粛な雰囲気にも包まれた会場内に、一瞬感嘆の声がもれた。……現在の会員数は1800世帯、8組の支部組織に分かれ、法座や教学研修会を開催するほか、孤児院への慰問や法座所に隣接する市営公園での清掃奉仕など、地域社会への貢献も図っている。」

これまでは絵像が描かれた掛け軸形式の軸装本尊であったが、これが金色の仏像の本尊となり、また、安置された本尊の背景の壁は台湾人が好む赤色(喜びをあらわす)であった。会員の話では、この入仏式の時が台南において最も



写真21 台南支部道場入式祝賀会(1997年、立正佼成会提供)
庭野日鑑会長を囲んで3支部長が集合。中央は庭野日鑑会長、後列の右から
莊金泳台南支部長、簡汝簾台北支部長、陳祺銘高屏支部長。



写真22 台南支部での矢野教会長の研修風景
(1997年頃、『佼成 中文版雑誌』第26期掲載写真、1997年7月発行)
宝前には金色に輝く本尊像があり、背景は深紅の壁である。

会員が多かった時期だった。

その後、第3章で述べたように、一法人から三法人に分裂し、2000年4月に台南市在家仏教立正佼成会という法人格を取得した。なお、同年6月には大館教会40周年記念大会のため、40名が大館教会に参拝した。翌2001年には大館教会幹部11名が交流指導のため台南を訪れた。大槻は1992年に亡くなったが、その後も大館教会との交流は継続していることがわかる。

公園南路は台南駅から徒歩で行けるところで利便性も高く、またワンフロアも広がった。しかし、地域活動センターという半公的な施設であり、会員が増えて日本から人が来ると入りきれない状況になった。また当時、台湾教会がおかれた台北支部で、物件を購入したという時期でもあった。

2003年には本部から1000万台湾ドルの支援、そして会員の寄付をつのって台南支部より700万台湾ドルを支出し、東区崇明23街にある元キリスト教会だった5階建ての現在の道場を購入した。道場購入の時の本部の支援以外は独立採算である。

1階にある宝前の間は約100坪、2階には事務室がおかれ、5階までであるので面積としては格段と広がった。しかしながら、道場の場所は台南の東側に位置し、中心部からはずれたところで、台南駅からは車で約30分かかる。バス便も不便だった。会員も高齢化してきて自分でオートバイにも乗れなくなってきたおり、人に頼ってくることは難しく、広くはなったものの台南駅から徒歩圏内の公園南路の時の利便性に比べて、アクセスが難しく集まりにくくなった。

(6) 台南教会の設立とその後

2008年12月には、台湾教会が発展的に解消し、台北教会と台南教会の二つの教会に分け、現地人の教会長が就任した。台南教会には台南支部と高屏支部の二つの旧支部が属することになり、台南支部の支部長だった荘が台南教会長に就

任した。12月8日に発会式並びに教会長就任式が行われ、来賓を含め160名が参集した。莊は2012年3月に85歳で死去したが、それまで7年間咽喉がんで闘病生活を続けており、実質的にはあまり教会に出ることはなかった。

莊が死去したあと、本部の説得もあって同年8月に支部長だった蔡麗金(女、1948生)が二代目の教会長に就任した。1989年に入会した蔡は、当初青年部として活動し、2003年には第1組の主任に、2005年には副支部長、教会に昇格した2008年に支部長になった。なお、蔡とは教会長に就任したばかりの2012年8月に台南教会で会ったが、当時、教会長の役をすることの不安について語っていた。莊が亡くなって、教会長の役を受けてほしいと本部から言われた時に、年齢も60代半ばになっており、能力にも自信がなく、受けたくはないとの思いが強かった。しかし、支部長は一人だけだったので、他に人はいないということで受けたが気が重いと語っていた。また自分が教会長になったあとは支部長のポストがあくことになるが、支部長になるには教師の資格が必要で、そこでの人材についても悩んでいた。

莊の死去に象徴されるように、日本語世代は高齢化や亡くなる時期に入っている。財の点では莊の時代までは問題はなかった。しかしながら、莊や毎月かなりの額を布施していた日本語世代の会員は亡くなり、また高齢の会員は自力では出てこられなくなった。また、一人で5～6名の家族分の会費を納めていた人もいたがそれも少なくなり、布施も会費も集まらなくなった。そのうえ、人間関係のトラブルもあり、教会運営に行き詰まり、蔡は2015年頃から辞めたいとの意志を本部に示していた。2017年6月に体調不良のために休養に入り、11月30日に退任した。休養中の半年間は本部の国際伝道部次長の中野泰秀が教会長代理をつとめた。2017年12月1日からは日本人の廣瀬幾世(女、1955生)が台南教会長に就任した。なお廣瀬は東京の小金井教会長の経験があるが、大学で中国語を専攻したので、読み書きはでき、ゆっくり話せばわかる。廣瀬は日本在住だったが、教会長就任後、新型コロナウイルスのため、渡航できなくな



写真23 台南教会 盂蘭盆会・中元節の時の道場玄関写真(2020年, 台南教会提供)

黄色の看板に赤字で台南市在家仏教立正佼成会と書かれている。盂蘭盆・中元節に際して、赤(中元節)・白(盂蘭盆会)の提灯がかかげられ、入り口のガラスには中元節への寄付者一覧を記した赤い紙がはってある。



写真24 台南教会 降誕会の時の写真(2019年, 台南教会提供)

宝前には通常は飯水茶を供えるが、特別な日には果物、野菜、仏供膳を供える。剣先型の紅白の紙は奉書で、特別な日に神酒に被せる。左に見える山型の塔は光明燈で、実際は左右にある。

写真中央は廣瀬幾世教会長、その左隣は胡利安支部長、日本語世代の陳皆竹(前列右から5人目)、梁本林(右から2人目)、郭麗嬪(左から3人目)の姿も見える。

るまで、毎月10日から2週間台南教会を訪れ、佼成会の基本の教義や実践を教えた。渡航ができない時は、スカイプやラインなどを使って、台南の会員と連絡を取り、法座も行った。

2020年12月1日には支部長の胡利安(女, 1961生)が教会長に就任予定である。胡は草創期に入会した郭麗嬪の娘で信仰二代目である。夫の仕事の関係で長らく、アメリカやカナダに居住していたが、2010年に帰国、2012年に第1組の主任、2016年4月に支部長になった。

なお、荘が亡くなった後、国際伝道部スタッフ竹野貴則(男, 1977生, 中国に留学経験あり。北京語はできる)が3カ月に一度、布教支援に訪れた。2015年からは矢島希和子(女, 1966生, 台南生まれ, 台北育ち。台湾人で、結婚で日本に帰化)がその担当になった。矢島は台湾語、北京語、日本語に堪能で、また日本の教会での活動の経験もあり、熱意をもって台南教会の支援を行っている。胡は二代目信者の発掘と取り柄を出してもらう形での協力依頼を行い、現在では二代目信者2名を含む50代の3名が中心となり、胡とともに、台南教会をなんとかしなくてはいけないという意識で再生に取り組んでいる。また、理事や組の主任も人材が若返った。本部側も胡の育成に焦点をあてての教育、教会実習の機会を提供している。このように台南教会は今まさに転換期にある。

次章では、一番早く台湾に佼成会が入った場所であるにもかかわらず、リーダーの交代等で、難しい展開をし、2011年には法人解散、2013年には道場閉鎖となり、支部として消滅した高屏支部について、その発端から消滅までについてみていきたい。

6 高屏支部の展開とその顛末

台湾と佼成会との関係の最初は屏東から始まっている。台湾布教の三つのルートのうち二つは台北教会と台南教会になったのに対して、高屏支部(屏東

と高雄)は台南教会の一支部となり、2011年に法人解散、2013年に道場が廃止され、消滅した。このようになる経緯について記録し、その変遷や推移を明らかにすることは、佼成会の台湾布教を考えるにあたって重要であると考え。しかしながら、高屏支部については、その展開を跡付けるにあたって他とは異なる困難に直面した。第一に、リーダー層の交代があり、台北や台南のように同一人物が継続して、中心を担っていたのではないこと、第二に、当時を知っている人の死去や高齢化により、聞き取りがほとんどできなかったこと、第三に、高屏支部は目黒教会の系統となっているが、台北の豊田教会、台南の大館教会という今日まで交流が継続されている教会と異なり、どこかで途絶えてしまい、目黒教会でもその資料を見つけることができなかったことなど、高屏支部の展開について叙述することに資料的な制約がある。そこで、ここでは、佼成会の機関紙誌掲載の記事や投稿記事、高屏支部関係の本部側の資料、大聖堂での体験説法原稿、関係者の聞き取り資料を用いて再構成していきたい。間がつかず、疑問点も多くあるが、資料探索もかなり厳密に行ったものの不明な点もあり、そのところについては注記等で記載することにする。

(1) 東海昌道との出会いと范涂玉英の入会

屏東に初めて佼成会の教えが伝わるのには、東海昌道(読みは「しょうどう」、1900-1990、岡山県持泉寺住職、尼僧)の存在が大きい。東海は『佼成』1967年5月号(106-109頁)に『台湾布教記』をのせているので、そこから布教の経緯をみてみよう。なお、この時は東海の所属は目黒支部と記載されている。

東海と台湾との縁の始まりは、1939年に京都の臨済宗妙心寺管長の命を受け「皇民化運動」の一員として台湾に渡ったことにある。終戦まで6年半、台湾の寺院を中心に宗教による民衆教化を行なった。1966年頃、東海がたまたま東京に出てきた時に目黒支部所属の倉田依久代(中目黒の二葉幼稚園園長)と知り合い、目黒支部に入会した⁽⁴⁰⁾。1966年の夏頃から佼成会の教えを台湾で広め

たいと考えていた東海は、1967年1月10日にかつての教え子に請われて台湾に渡る。屏東市の東山禪寺(住職は圓融法師)を布教拠点に1か月に亘り、仏教婦女同修会(市の有志の女性がつけている会)や中堅層の市民に、庭野日敬会長(当時)の著書である『人間の復帰』から「空にもとづく十の理法」までの法話を日本語で、しかも理論的に説いた。佼成会の映画も上映した。この仏教婦女同修会の会長であった范涂玉英(1920-2001)は、この時の東海の仏教講演会を聞き、在家の修行者で組織されている佼成会の教えを知った。

東海は更に、岡山(台湾)の大嵩山の禪寺で出家僧100人に対しても佼成会の教えを説いた。東港(台湾最南端の町。かつて日本軍の遺骨が集められ、尼僧としてただ一人東海が連隊葬に立ち合った場所)や仏教会嘉義布教所でも2日間で百数十名に説法した。こうして台南地方を回り、44名が入会した。

翌1968年、東海は再度屏東を訪れ、この時にも東山禪寺で説法を行い、およそ20日間滞在している。この時には二葉幼稚園園長の倉田依久代も同行した(台湾教会発行『佼成』2006年10月5日号)。

范について佼成新聞の記事で早い時期に出てくるのは、1968年7月19日号の記事の「黒川氏(団参課)台湾へ布教“拠点つくる”と意欲」というもので、東海が1967年に45人導いた中に范がおり、当時日本に留学していた2人の娘を連れて日本女子大の恩師である佼成病院院長岩田正道を訪ねてきた時に、当時団参課にいた黒川享市郎が対応した。その後文通で交友を温めてきており、当時范宅で月に数回の法座や集いが開かれているということが述べられている。そして黒川が7月に20日間の予定で台湾布教に行くと言及されている。

范が庭野会長の法話のどこに感激したのかについては、佼成新聞1979年1月5日号の「教えは世界へ」の中の「“悪条件”克服し信心深める」と題した記事に記載がある。すなわち「『国境や人種を越えて、あらゆる人々が合掌礼拝し合うことが仏さまの本願なのです』という法話を聞き、それまで『信仰とは拝むこと』と思っていた范はいたく感激した」のである。

(2) 范涂玉英の本部と教会での研修

范が次に、出てくる記事は1970年12月18日号の佼成新聞で、「本国で教えを広めます 単身、来日して修行に励んだ2カ月間、御本尊拝受に感激、13日決意を心に秘めて帰国」というタイトルで、「台湾の人 范涂優惠さん」とかなり大きな記事で紹介されている。本尊拝受者には選名が与えられるので、その選名が「優惠」である。

長文になるが、これは范にインタビューして書いた記事であるので、その内容を紹介しよう。1979年に観光での海外渡航が自由化される前での訪日ビザをとる苦勞についても触れられている。

「范さんが来日したのは(1970年)10月20日。『生きた仏教をなんとか身につけて台湾に正しい仏法を広め多くの人にしあわせになってもらおう』という一心からだった。范さんが本会を知ったのは今回の来日より4年前の(昭和)41年12月(1966年12月⁽⁴¹⁾)台湾に布教に来ていた岡山教会の東海昌道さん(71歳)が大聖堂のスライドを写しながら『ここでは、仏法で悩みや苦しみの原因を探り、どんな気持ちで人間は生きていくべきか、また人間同士の関係はどうあらねばならないかがお互い同士で話し合われ、多くの人がしあわせになっている』と聞かされたときだった。……台湾でただ一つ不満に思っていたのは『仏教が実生活に生かされていないこと』だった。次女の大学入学に合わせて来日し、大聖堂で直接聞いた庭野会長の法話に感激し、帰国後は、友人知人を次々と50人ほどお導きした。

しかし、頼りとする機関紙誌が届くのも半年に一度くらいであり、1968年に東海さんとその導きの親である倉田依久代さんと団参課の黒田享市郎さんが一回ずつ台湾まで来て、総戒名の祀り込みをし、法の話もしてくれたが、その後は東海さんとの月一回の手紙のやりとりが唯一の頼りだった。月に一度、自宅を開放して、東海さんの手紙や機関紙誌を中心に話し合ってきたものの、悩み

事を出されると、どうしていいのかわからなかった。『勉強のために来日したい』
と思いはつのれど、厳しい渡航制限のために、なかなか実現できずにいた。

ちょうどその頃、『1971年3月に日本女子大を卒業する次女の勉学希望』名
目で1970年10月に2か月の来日が可能となった。来日すると次女の慧芳はそっ
ちのけで、東海さんが目黒教会から岡山教会に移籍していた関係から、まずは
岡山教会で午前中は法座、午後は教会長から根本仏教の特別講義を受け、東京
では団参会館に泊まり込みながら、大聖堂の法座に座るほか、目黒教会での読
経供養や手どりに参加し、実地研修に励んだ。その熱意に2つのプレゼントが
あった。一つは12月8日の成道会で、庭野日敬会長より『台湾の人たちに幸せ
な人生を送らせるんだよ』と直接励ましの言葉をもらったこと、そしてもう一
つは、布教本部から1970年12月11日の本尊勧請式での特別拝受を許可され⁽⁴²⁾、
台湾で初めての本尊勧請家となった。」

これについては、「本国での開拓者に 庭野会長からも激励のことば」の小
見出しで、その様子が以下のように叙述されている。「『台湾にもご本尊を』と
願いながら来日したものの、『ご法を理解し、人を救ってきた人に授与される』
と聞き、諦めていただけに、『御本尊と一緒に帰れることは百万人の味方と同じ』
と大喜び。『帰ったら関係官庁に本会の教えを話し、堂々と布教し、沖縄やロ
スアンゼルスのように教会を設置してもらえるようにがんばりたい』と庭野会
長の法話のテープや映画『普門の黎明』のフィルムなどをカバンにいっぱい詰
め、ご本尊とともに帰国していった。」

范の記事が次に佼成新聞に載るのは1974年4月26日号である。范は「何とか
仏教真理を知り、台湾でこの教えを弘めたい」この思いで台湾に三部経を持ち
帰り、毎朝晩読誦を続けたが、解釈できない。しかし、本尊勧請から4年後、
次女慧芳の日本の大学院卒業を機に、三度目の来日を果たすことができ、「仏
教真理を日常生活に生かせる道を……」と願い、1974年4月に1週間の本部で
の研修に参加した。法座修行、教育課での家庭教育、カウンセリングである。

この時の様子は以下のように記述されている。

「范さんは『台湾では他人の前では絶対に自分の恥を出さない。だから“サンゲ(懺悔)”という言葉を持たないのです』と語る。午前中は円座を組み、相手の仏性を拝む法座修行。午後からの家庭教育の研修を通して、毎朝晩読誦していた三部経をどのように日常生活に取り入れるのか、研修はその疑問に答えてくれた。『三法印』『十二因縁』『八正道』……法華経の一字一句をノートに書き留め、宿舎である団参会館では夜遅くまで机に向かう毎日が繰り返された。

台湾は仏教国だけど、なかなか救われていない。仏教は日常生活の中で生かされなければいけないと思った。難解な教義、妻子を持たない出家の僧侶の説法では、家庭生活を営む人達の喜怒哀楽に應えていけない。念仏を唱えていれば極楽往生するという、台湾の仏教の現状に心を痛めていただけに、この1週間は、范さんにとってささやかな“希望”を与えてくれた。帰国のトランクの中には数冊の仏教書が詰め込まれた。『私の成長のために、悩める多くの人のために、私を捧げます』という決意を胸に帰国した。」

(3) 青年の船の来台と水原教会からの文書支援

范の活動を紹介した記事に、1979年1月5日号の佼成新聞に「“悪条件”克服し信心深める」がある。この内容を紹介しよう。

范は、台北に次ぐ大都市である高雄市(1979年当時 人口180万)で婦人会会長、「生命の電話センター」顧問、家庭裁判所調停委員という奉仕活動を行う中で、佼成会の教えを伝えた。夫婦の離婚問題、少年非行の指導、その他社会問題の解決に当たっていった。良き相談相手となれるように、読経を通して相手の幸せを念じた。あるいは日本から送られた数冊の機関紙誌を貪るように読んだ。「1人でも多くの人に仏性を信じてほしい」と必死だった。非行少年の世話を親身に行い、自宅まで慈悲かけに出かけた。刑務所に教誨師として赴き、大勢の囚人の前で説法もした。「庭野会長(当時)が説かれる仏さまの教え

を私はこのように悟らせてもらっている」と語りはじめ、先祖供養、そして家族がどれほど心配しているかと切々と説いた。すると皆ボロボロと涙をこぼすのだった。出所した少年に街でばったり出会うと「今までのボロボロの気持ちはすっかり捨てるんだよ」と母親のように触れ合い、そっとお数珠を手渡してやった。こうした范の活動を支えたのは、日本の会員からの激励があった。

当時は戒厳令下であり、機関紙誌は検閲を受けるので、全部届くというわけではなかった。それに対して助っ人が現れた。1974年第2回「青年の船」で台湾に寄港した約500名の青年たちは、機関紙誌や庭野日敬会長(当時)の著書を范に贈った。范は「人生最大最高のプレゼントでした」と、自宅を図書館に開放し、1人でも多くの人にと貸し出した。

「青年の船」とは、青年部活動方針「25万活動部員育成」の一環として「アジア諸国との理解を深め、国際的な感覚を身につけた信仰青年を育成する」ために実施されたもので、1973年7月の第1回から第4回まで4年間続いた(その後は飛行機となる)⁽⁴³⁾。横浜港を出発し、約14日間で台湾や香港などに寄港した後、フィリピンのモンテンルパ日本人墓地や日フィリピンの平和友好の印として青年部が募金して建立したフレンドシップタワー、激戦地であった海域での船上慰霊供養を行なった。毎回174~178教会の青年部員のほか、講師団、教区代表教会長など約500名の参加者があり、20~25歳の青年が大半を占めた。

この第2回「青年の船」には、新潟県の水原教会(現在の新発田教会)の阿部教会長はじめ22名の会員が参加していた。一行は、高雄にあった范の自宅を訪ね、現地の会員たちと法座を開いた。范はこれまで数回本部を訪れているが、他の会員たちは、教えに触れる機会も少なく、口々に修行の困難さを水原教会の人々に訴えた。

台湾では、1949年から1987年まで続いた戒厳令下では、出版物の検閲が行われ、集会も制限されていた。特に出版物の検閲は大変厳しく、范に日本から送られてくる機関紙誌もほとんど届かないのが実情であった。「せめて会長先生



写真25 第2回「青年の船」の横浜港出港の様子(1974年、立正佼成会提供)
177教会の青年部員など438名が参加。



写真26 第2回「青年の船」での船上慰霊祭(1974年、立正佼成会提供)
激戦地であった海域での犠牲者の慰霊のために、戒名や髭題目を書いた紙を
題目を唱えながら流す慰霊のやり方。

の本だけでも読みたい」という会員の願いは切実であった。その訴えに心を打たれた阿部教会長ら幹部は、帰国後、早速手書きによる手紙方式で郵送する作戦を立て、すぐに実行した。このことについては佼成新聞1975年6月20日号に「台湾の会員へ手書きの著書」という記事が掲載されているので、みてみよう。

阿部教会長が『無限への旅』、新保秀子青年女子部長が『新釋法華三部經Ⅰ』、木庸江同副部長が『仏教の本義』、蔵佐實士組長が『現代語の法華經』、田中佐和子地区主任が『仏教のいのち法華經』というように、それぞれが手書き作業を始めた。おタスキをかけ、400字詰め原稿用紙に万年筆で丁寧に書き写す。現地での出版も考え、「はじめに」、「目次」などまったく本と同じに書くなど、細かな点も配慮された。庭野会長の著書10冊を10人の幹部が担当している。郵送は私信の形式をとるため、原稿用紙20～30枚の区切りが良いところで送る。范宛にすでに3回送っていた。

印刷された1冊の本を書き写すというのは、想像を絶する根気が必要だ。「目次だけで50枚になり、慣れるまでには目が疲れ、苦痛を感じた」と、昼間は会社でタイプを打ち、毎晩2～3時間、道場で書き続けている荒木さん。やはり一日に1時間、仕事の合間を縫って書き写す蔵佐さんは「懈怠な気持ちが起こる度に真剣に念じるのです。み仏さま、会長先生のみ教えを異国の地の同信の方々にお伝えさせていただきたいと。すると不思議と筆がスラスラと進むんです」という。范からは原稿が届く度に礼状が教会に寄せられる。「会長先生の仏教の解釈を読ませていただくと、大変わかりやすく、合理的で、こちらの仏教がいかに祈祷的であるかがわかります。」「会員で回覧してむさほるように読みふけています」等々の返信がある。

他方、手書きグループの会員たちにとって台湾の会員からの便りは大きな支えになっていた。だが、それ以上の功德は書写行の尊さを、身をもって知ったことだった。「台湾の皆さんに喜ばれ、ありがたいことですが、今では自分の信行としてやっています」と阿部教会長は語る。メンバーも異口同音に「教師

研修で一通り学んだつもりでいましたが、書写行であらためて教えの深さがわかりました」(田中主任)、「ただ有難くて書写の旅に涙が出てくるんです。法華經の尊さ、会長先生の偉大さが肌から伝わってくる感じ」(蔵佐組長)、「足元の実践の大切さがわかった。毎日書写を通じ、教えに触れることによって、日々教えに照らして自己を戒め、充実した生活を送れるようになった」(田中康晴壮年部員)と語っている。こうした作業をとおして、范をはじめとする高雄、屏東の会員たちにとってばかりでなく、筆写する側にとっても信仰的に意味があり、互いに高め合っていたことがわかる。

そして范は1978年第20期正教師を拝受した⁽⁴⁴⁾(佼成新聞1979年1月5日号)。

(4) 范涂玉英の日本への移住と中国仏教会との交流調印に果たした役割

范については、ずっと台湾に居住して布教していると思っていたが、調べていくうちに、1970年代後半に夫の仕事の関係で来日し、のちには二重国籍ではあったが日本に帰化し、日本で亡くなり、佼成霊園に墓地があることがわかった。范の居住地について、機関紙誌で確認できるところは、『佼成』1968年1月号、1971年1月号の「海外だより」では、住所は屏東になっている。また、1974年7月には「青年の船」の人々が高雄の范宅を尋ねたとの記述がある。1976年1月号の「海外だより」では高雄になっている。そして佼成新聞1979年1月5日号では、夫の仕事の関係で茨城県東茨城郡に居住していると書かれている。

范と親しく交流していた黒川の話によると、夫が茨城県東茨城郡小川町に医師として招聘されたため、長男家族ともども日本に移住したとのことである。夫の范永拱(1918-1986)は、戦前、日本の昭和医大に留学している。また、屏東の范の実家である涂家で書生をしていた。後に范の実家の隣に外科病院を建て経営していた⁽⁴⁵⁾。范の実家の涂家は上流階級に属する名家であり、范家も由緒正しい家であった。また、范は高雄や台北にも家を持っていた。小川町に招聘された理由はさだかではないが、小川町がいくつかの町と共同で市民病院



写真27 「中国仏教会・立正佼成会の親善交流に関する同意書」調印式での記念撮影
(1980年，立正佼成会提供)

長沼基之理事長(右から4人目)と范涂玉英(右から3人目)。調印式については138頁の写真1，写真2を参照。



写真28 調印式に尽力した范涂玉英と范慧芳(1980年，立正佼成会提供)

長沼基之理事長(左から2人目)，范涂玉英(左から3人目)，次女の范慧芳(左から4人目)。

の医師として日本に招聘した。その際には、住居も小川町が新築住居を用意したとのことである。

日本在住であり、後に日本に帰化するのだが、范は日本と台湾を往復しながら法を広げていったようである。

范が佼成会にとって果たした役割で重要なのは、中国仏教会と佼成会の交流調印にかかわることである。屏東では范が中心になり、台北では簡が中心になり、台南では莊が中心になって佼成会のサンガが開始していた。しかしながら戒厳令下でもあり、布教は大っぴらにできなかった。佼成会では1977年から正式に布教ができる方策を模索し、そのためには中国仏教会との交流協定の調印が必要だという認識にいたった。この間の経緯については第3章で先述してある。

范は、屏東と高雄において、中国仏教会の支部の世話役をやっていたことから、中国仏教会のナンバー2である高雄近郊の寺の住職である淨心法師⁽⁴⁶⁾から信頼を得ていた。長女の范曉枝(1944生)は、武蔵野音大を卒業し、その後、アメリカのミシガン州立大学の大学院でピアノを学んだ。1970年の大阪万博の際には、アメリカ在住にもかかわらず、呼び出され、中華民国代表として両陛下(平成天皇)の案内役をしたくらい、中華民国政府から信頼があり、中日英など語学に堪能な才媛でもある。次女の范慧芳(1947生)も、日本女子大を首席で卒業し、同じく語学に堪能な才媛で、中華航空で亜東国際協会ビザ発行審査官を務め、後に台北市長の秘書も務めている。この2人の存在は、中国仏教会との縁を作るには非常に大きかった。

1980年3月9日、台北市にある中国仏教会において、親善交流調印式が行われた。この目的は、同じ仏教徒として相互の友好を図り、日華両国の仏教興隆と文化交流を目的としたものである。調印式には佼成会から長沼理事長、西川教務部長、荻野施設部長、宮坂国際課長のほか菊地前多摩教区長(前豊田教会長兼任)など台湾布教にかかわりのある教会からの代表17名と台湾国内の会員

併せて45名が出席した。この日本側に范もいた。中国仏教会からは、白聖会長、悟明法師、了中法師、淨心法師をはじめ、中国仏教会の要人15名が参加した(『佼成年鑑』1981)。

調印式はまず両国国歌の斉唱にはじまり、三婦依文の唱和、世界平和祈願の黙祷と続き、中国仏教会の白聖会長と佼成会の長沼理事長がそれぞれ挨拶に立った。白聖会長は「仏教は調和の教えであり、本来の大乗仏教の精進に帰り、親善友好を深めたい」と挨拶した。一方、長沼理事長は故蒋介石総統の「以德報怨」即ち“怨みに報いるに、徳を以てする”との聖意こそ、世界と人類を平和に導く大道であると前置きし、「私たち両団体の将来も、互いの長所と長所をもって因縁を結び合う善因善果の仏道を基底において、理解と協力の歩みを進めて参りたい」と述べた。この後、来賓の中華民国立法院の立法委員の張希哲氏が祝辞を述べ、佼成会からは長沼理事長が調印に立ち、双方が調印した。最後に中国仏教会の悟明法師と佼成会の西川教務部長が今後の両団体の交流の決意を述べた(佼成新聞 1980年3月14日号)。

この調印式には范と長女の曉枝と次女の慧芳が、通訳をはじめ、すべての段取りを計らっていた。范は、この頃、すでに日本に帰化し、日本在住だったと思われる⁽⁴⁷⁾。

(5) 目黒教会屏東連絡所の設立と陳祺銘の入会

目黒教会の屏東布教については、不明な点が多いが、『旧海外布教構想』という国際伝道部の資料の中に、屏東連絡所についての記載を発見した。そこには、「1985年6月以来、会員涂氏所有のビルの3階(約60坪)を連絡所として使用している。通常は集会がもたれておらず、朝夕のご供養がなされるのみで、連絡所の有効的な利用が望まれる」とあり、賃貸費として3万円が目黒教会より涂氏に支払われていると記載されている。涂氏とは范涂玉英を示し、范の実

家のもっていたビルであると思われる。

范がどの程度、当時の屏東布教にかかわっていたかはわからないが、上記を見る限り、目黒教会が屏東布教に行く際は、基盤がないところに布教に行くのは困難なので、范が何らかの役割を担っていたのではないかと推測される。また、范の家と密接な関係にあった林応全⁽⁴⁸⁾（男、1993年当時71歳、佼成新聞1993年9月17日号参照）が、范がいなかったときは対応していたと推測される⁽⁴⁹⁾。林鳳山（2005年当時80歳）が范に続いて法座所のリーダーとなった記述もあるが、詳細は不明である⁽⁵⁰⁾。だが、高屏では次のリーダーとなる人物が現れた。陳祺銘（男、1938-2015、選名：憲祥）である。

陳は1993年6月5日に大聖堂で体験説法をしているので、その説法原稿から入会の経緯やその後の展開についてみておこう。

陳は、1938年に屏東市で生まれた。誠実な父と信心深い母と3人の姉を持つ家庭に育った。3番目の姉は16歳の年に亡くなり、その遺骨を東山禅寺に納めた。この寺は1970年頃、目黒教会の布教拠点であった。よく両親とともに東山禅寺をお参りしていたので、自然に信仰心が深く植えられていった。大学を卒業後、台湾電力に就職した。1984年11月11日、仕事で日本に行く際、台湾の空港で、知人の紹介により、台湾布教から日本への帰国途中であった目黒教会の小俣支部長、小色支部長、鈴木教務部長と出会った。飛行機の中で、知人の通訳で鈴木教務部長から佼成会の教えを詳しく知ることになる。その縁から、まずは大聖堂を参拝してから仕事に行くことを決め、日本到着の翌日11月12日、初めて大聖堂を訪問し、そこで目黒教会の田中身江子教会長と出会い、入会することになった。大聖堂で当番が合掌して出迎えてくれたことが、あなたを心から歓迎しますという印象で、第一に感激したことであった。また、学林生が親切に案内してくれ、日本語はわからなくてもその誠実さが伝わってきた。その夜は養成館に泊まったが、感激ひとしおで眠れなかったほどだった。

帰国後は、日本語の『佼成』を読めるようになりたい一心で、日本語の勉強

にいそしむことになる。会社日本語のわかる年配社員がいたので、頼んで、『佼成』に何が書いてあるかを教えてもらった。彼はクリスチャンであるにも関わらず、この教えは素晴らしいと褒めてくれたことが励みになり、益々学びを深めていった。当時の屏東連絡所は、始まったばかりで、人も少なく寂しい感じであった。そこで、皆の役に立ちたいと一念奮起して、自ら『佼成』を会員の家に届けることにした。早朝の配布の最中、後ろから自動車に追突されたが、幸い籠に載せていた『佼成』誌がばらまかれたことで、前から来た車がスピードを落とすことができ、難を逃れることができた。それ以降は、自宅であげていた毎朝の読経供養を連絡所に行ってするようにした。その後、田中教会長から正式に文書の役をもらい、年4回屏東を訪れる本部派遣の齋藤講師から研修を受けるようになった。連絡所では人間関係でゴタゴタがあったが、「大変なことがたくさん起こる所ほど、やりがいがあると会長先生から教えていただいているので、頑張ってください」と講師から励まされ、努力を重ねた。その甲斐あって、1989年11月15日、本尊を勧請された。目黒教会の代表者と共に大聖堂の壇上に上がり、中央で庭野日敬会長より拝受した。

海外布教課が設立されたことで、1990年、連絡所は法座所に昇格し、陳は主任になった。その時には会員は130名にまで増えている⁽⁵¹⁾。ところが、翌年にある団参に向けて活発に手どりが行われていた最中に、片道2時間半かかる原子力発電所に勤務先の異動が決まる。往復5時間の通勤と、夜の手どり、研修などで、無理がたたり、心筋梗塞で緊急入院となってしまう。しかし、「苦しみは喜びを味わう為にあるのだ」という庭野日敬開祖の教えを胸に数々の困難を乗り越え、1991年の第一回世界僧伽結集団参(参加総数670名)に参加することができた。この団参には、駐日代表部にいた許水徳(後に高雄市長、台北市長、駐日大使)が参加し、佼成会を高く評価してくれる機会となった。この許の尽力で、1992年10月に社団法人中華在家仏教立正佼成会が法人認可された。

(6) 台湾教会高屏支部への昇格

1993年1月に台湾教会が設立され、初代教会長田中伸佳が赴任し、陳は高屏支部の支部長を拝命した。

陳は、佼成会の新しい法座所として自宅(民権路)を提供し、以後十数年続くことになった。台湾教会になってから屏東と高雄を合わせて高屏支部と呼ぶようになった。台湾教会三代目教会長(1999年12月～2004年11月)の後藤益己の話では、初代教会長(1992年12月～1995年11月)の田中は、豪放磊落な性格から、台南や高屏など南部の気質が肌に合うこともあり、月の半分以上を南部の布教に力を入れていたと述べている。また、陳については、「実に純朴な人柄で、その純粹に信仰する姿は、よく献身的に仕えた妻と共に、敬意を払う存在であった。この2人の存在は大きく、高屏が伸びる素因の一つであった。また、高雄には、当時、謝恵美(1928-2013)が主任として存在した。高雄から屏東の法座所まで通い、毎日そこにいるということは信者にとっては、何より力強いことでもあった」と語っている⁽⁵²⁾。

1993年9月17日号の佼成新聞には「サンガを訪ねて台湾編」の中で高屏支部(上)が「熱意が人の心を動かす 教え伝えたいと手どり、導き」というタイトルで扱われている。高屏支部の当時の様子やそれにかかわった人々についてみてみよう。

当時の会員は約350世帯で、支部のおかれている屏東市のほか高雄市、鳳山市に地区連絡所がある。高雄地区連絡所主任の謝恵美(66歳)は、日本人で入会は1953年である。1960年に台湾人の夫と共に高雄市に移住した。移住後、佼成会の活動から離れていたが、1987年に屏東市に連絡所があることを知り、以来、毎週2時間かけて通い続けている。また高雄地区連絡所では毎週1回集いを開き、法座を行っている。謝は謙虚な人柄で会員の信頼も厚い。「主任さんは手どりがまめ。そのおかげで毎週集いに参加しています」と林応全が話す。それ



写真29 屏東市にある台湾教会高屏支部法座所の外観(1997年 立正佼成会提供)
立正佼成会高屏法座所の看板がかかっている。



写真30 台湾教会高屏支部法座所での盂蘭盆会の読経供養の様子
(1997年頃、『佼成 中文版雑誌』第27期掲載写真, 1997年9月10日発行)

に対して謝は「台湾語をうまく話せない私を会員さんがよく支えてくださっているのです。もっと手どりに歩かなければなりません」と語っている⁽⁵³⁾。

陳基銘支部長(45歳)は電力会社に勤務しながら布教に歩いている。努力家で機関紙誌を読むために独学で日本語を習得した。ラジオの日本語講座を聞いたり、社内の先輩から学びながら日本語を勉強した。現在では陳が講師で「法華経研修会」「日本語教室」を行うまでになった。

また、陳について、姉で主任でもある陳錦薇は「陳支部長さんの熱意は素晴らしい。私たちの目標です」と話している。彼女は陳の勧めで機関誌を読み、自他共に救われる教えに感動して入会している。まもなく友人知人を多数導いた。さらに、仕事で支部活動に参加できない陳に代わり、責任者として読経や法座を行い、率先して手どりに歩くようになった。彼女の熱心な手どりによって法座所に通い、手どりに歩く会員も増えている。

また、青年部の存在も大きくなった。9月24日号の高屏支部(下)は「青年部の活動活性化 仲間を誘い地域で奉仕」というタイトルで、青年部の様子が描かれている。毎週月曜日と水曜日の夕方に高屏支部法座所で青年部の集いが開かれる。陳の教学研修や日本語教室が主な内容である。集いに参加する青年も増えてきていた。その理由の一つは青年部員の手どりである。呉俊寶(34歳)は帰宅後、青年部員宅を回り、集いに誘ったり、機関誌『中華佼成』を配布したりしている。その中から毎週十数名の青年が集いに参加するようになった。呉が法座所に通うきっかけになったのは7歳になる娘の存在だった。彼女は毎朝祖父と一緒にご供養を上げる。「パパも一緒にご供養しようよ」と言う娘の言葉でしぶしぶご供養を上げ、法座所に通うようになったが、しだいに仕事や人間関係がスムーズに運び、毎日が充実していくように感じた。彼は電気メーカーのプログラマーだ。これまで業務がはかどらないとイライラし、上司や同僚と衝突することも多かったが「気持ちに余裕ができるようになったのは、ご供養のおかげだと思います。すぐに反省できることがありがたい」という。さっそ

台湾における立正佼成会の展開



写真31 台湾教会高屏支部法座所での陳基銘による法華經研修会
(1996年頃、『佼成 中文版雑誌』第18期掲載写真, 1996年12月10日発行)



写真32 台湾教会高屏支部法座所での婦人部の法座修行
(1996年頃、『佼成 中文版雑誌』第18期掲載写真, 1996年12月10日発行)

く高校時代の友人7名を導いた。「先輩は仕事だけでなく、生活の悩みにも相談に乗ってくれます」と話す邱武昭は呉から夫婦で導かれた。

教えを学んだ青年たちが仲間を誘う。そして仲間が増え、活動が活性化していく。ボランティア活動も始めた。「地域で奉仕を」と仲間の中から自然に声が上がリ、すぐに屏東市内の老人ホームでホーム内の清掃を始めた。毎月、市内の施設や孤児院で介添えや清掃活動を継続している。「青年たちの行動に私たちも教えられました。1人でも多くの人に幸せになってもらいたいのので、教えをもっと広げていきたい。」と陳が語っている。

元台湾教会長の後藤は、「高屏支部は実に楽しいサンガであった。純粋に佼成会の教えに帰依するリーダーの下、法華經の研修も法座も水を吸い取るように浸透していく感じがした」と述懐している。

(7) 高屏支部閉鎖へ

1993年当時は350世帯もの会員が集う支部となり、1998年には高屏支部の3拠点に本尊も勧請されるほど、布教は伸びて行った⁽⁵⁴⁾。そして第3章で述べたように、中華在家仏教立正佼成会という一法人が、三法人に分裂することになり、高屏支部は1999年10月に社団法人立正佼成会屏東仏教会という法人格をもつようになった。しかし、その2年後に陳の病気という出来事が起こった。

台湾教会発行の『佼成』2006年10月5日号の中の記事である「高屏支部の紹介」によれば、「2001年頃、日本に研修に行った陳支部長が脳梗塞で倒れ、半身不随となった。妻の献身的な看護を受けつつも、言葉が不自由になり、リーダーの役が果たせなくなってしまうと、会員が大量に流出し、わずか20名くらいが残り、教会活動も読經供養をするだけとなり、高屏支部は瓦解寸前であった。それでも幸運なことに四代目の長本和彦教会長(2004年12月～2006年11月在任)が尽力し、駅からわずか3分の場所に広い新法座所を借りられることになり、2006年4月に遷座式を盛大に行うことができた。会員はその後、毎月安定して

成長している所であり、高屏支部は幾度かの興隆と衰退の試練を乗り越えてきたので、更なる成長を信じている。将来、高屏教会の若返り、生活化、活力がある方向に進み、多くの会員が心ひとつに、仏道修行の中で社会の動脈と潮流と認識され、新しい局面を創り出せることを期待したい」との記述があるが、結果的には、2011年に法人解散、2013年に支部は閉鎖されることになった。

高屏支部の法座所は長らく陳の自宅であったが、2001年に病に倒れてからは、布教に協力してきた妻も介護に専念せざるを得なくなり、法座所の移転の申し出があった。そこで2005年頃(推定)法座所を移転したが手狭であったために、2006年に再移転となった⁽⁵⁵⁾。

高屏支部法座所の場所については、現地発行の『佼成』誌の奥付から読み解くと以下のとおりである。

『佼成 中文版雑誌』35期(1999年2月)には、連絡先として以下の住所の記述がある。「高屏支部 屏東市民権路60巷4号、屏東法座所 屏東市民権路60巷10号、高雄連絡所 高雄市和平一路和平ビル4階、高雄市苓雅区河南路299号4階」とあり、少なくとも1999年2月までに、陳の自宅とは別に屏東法座所を構えていたことが推測できる。

また、『佼成 中文版』(1期:2004年2月~11期:2005年11月)によれば、「高屏:陳棋銘 立正佼成会屏東仏教会 屏東市民権路60巷4号、王良江 鳳山市文南街120巷33号」との記述があるので、2005年11月、つまり陳が病に倒れた後も4年間は、自宅を提供していたが、屏東法座所の記載がなくなっていることから推測すれば、会員も少なくなり、屏東法座所を維持できず、拠点が陳の自宅のみになっていたと思われる。

病に倒れた陳の後任の支部長と目された李金山(男、1942生)は、中華電信会社のエンジニアだったが、妻が重い病にかかり、自身も交通事故に遭い、看病しながらの役は不可能となった。長本は、次に陳の姉の子供にあたる林金珠(女、1959生、1999年入会)を当面副支部長として育て、李明翰(男、1973生、海外修

養生として1999年4月～2001年3月まで日本で研修)を理事長として2人体制で盛り立てることを企図した⁽⁵⁶⁾。しかし、2008年突然、林が家庭の事情で屏東を去り、台北に行ってしまう。次に支部会計から支部長となった鄭麗容(女、1956生、2003年入会)も2011年には家庭に経済的な問題が生じて屏東を去り、台北に移り住むことになった。

2007年8月の時点では台湾教会三支部幹部合同会議が台北で行われ、人材育成についても検討されていた⁽⁵⁷⁾。しかし、高屏支部の場合、幹部名簿に名前があっても実質的な幹部はいなかったと思われる。入会からさほど年月が経っていない時点で重い役に抜擢されても、修行が十分でないので、何か事が起きた時に本人がすべてを投げ出してしまうことがある。幹部の育成が急務であったが、同時に育成の難しさが伺われる。なお、2008年に台北教会と台南教会が設立された時には、高屏支部は台南教会所属の支部となった。

2011年8月に屏東県政府から「高屏支部の理事が任期を過ぎているのに、未だ改選されていないので、1ヵ月以内に理事選挙を開催するか、2ヵ月以内に法人の解散を要求する」という通知があった。会員数の減少により、理事9名と監事3名の選出さえ困難だったため、支部の財産が屏東県政府に没収されることを避け、屏東県政府の自発的解散方式を取った。10月に解散のための会員大会を開き、11月25日をもって社団法人立正佼成会屏東仏教会は解散し、台南教会の法人の管轄下に置かれた。佼成会本部としては、2013年2月11日、正式に高屏支部を高屏法座に格下げし、拠点長も鄭麗容支部長から李明翰主任に交代した形をとり、実質的に高屏支部を閉鎖した。拠点法座所の本尊は、同年2月3日、当時の台南教会長の蔡麗金が導師となり、本部から国際伝道グループ次長の萩原透公ら立ち合いの下、降納式を行なった。高雄にあった3拠点の本尊を本部に返納し、支部を閉じた。台南教会からは蔡と理事長の陳正義がトラックを仕立て、本尊と仏具などを台南教会に持ち帰り、戒名室に保管した。現地会員の心情を考慮したかたちだと思われる。同年2月7日で拠点の賃貸契約が

切れるタイミングでもあった。5年間は本部が賃貸料を支払っていた。

高屏支部は、陳のような優れたリーダーが誕生した時には会員数が飛躍的に伸びたが、そのリーダーがいなくなると、幹部育成が十分に実を結ばなかったこと、会員数の減少と共に財政的な問題から拠点維持も困難となり、閉鎖せざるを得なかったと思われる。

2017年12月に台南教会長になった廣瀬幾世は高屏支部閉鎖の真実を知りたいと思ったが、台南教会の法人規則では会費の納入が2年間なければ自動退会となるため、元高屏支部の会員はすでに名簿上存在せず、現地会員は誰もが口を閉ざし、なぜ閉鎖に至ったのかを正確に把握できなかった。2018年9月に高雄で主任をしていた謝恵美の次女の謝麗華と連絡を取ることができ、恵美がすでに亡くなっていることを知った。一方、高屏支部の本尊は、布で覆ったまま、厨子の扉も閉じた状態で台南教会の戒名室に置かれている状況が続き、会員の間にもいつまで置いておくのかという疑問が生まれていたため、再度本部で検討し、台北教会にあった基隆法座所、台中法座所の本尊と共に、正式に返納手続きが取られ、2018年12月に本部に返納された。

ところが、2020年1月になり、突然、李明翰と連絡が取れ、彼の家に残っていた大量の仏具と物品をすべて台南教会に運び、再入会の手続きが取られた。また陳が2015年にすでに亡くなっていることもわかった。だが、この空白の7年間について、李は未だに口を閉ざしているが、どんな形にせよ、佼成会の本尊を守ってきたことには変わりはない。今後、屏東での布教がどう展開していくのか、あるいはこのままの状態がしばらく続くのか、それはわからない。しかし、一歩前進したことだけは確かだと言えるであろう。

おわりに

台湾では戦後の本省人と外省人との軋轢があったために、日本語リテラシー

が高い本省人が、親日的台湾人として日本の宗教の担い手の役割を果たすことができた。現在では本省人、外省人という二分的な区別ではなく、台湾人アイデンティティが生まれている。歴史的条件が変化してきた今日においては、このような過程で展開してきた日系新宗教の新たな担い手を創出するのはかなり困難になっている。これは佼成会ばかりではなく、日本語世代から始まった宗教が抱えている問題かと思われる。藤井は「日本宗教を受容したのは戦前の植民地時代に日本語教育を受けた本省人である。戒厳令解除後の台湾で日本宗教が必ずしも発展しなかったのは、彼らの高齢化と需要層の減少に関係する」(藤井 2007: 105)と述べているが、ここからの脱皮が日系新宗教にとってもとめられることだろう。

佼成会の場合は、1971年に台北(簡汝廉)、1975年に台南(莊金泳)、1967年に屏東(范除玉英)と三つの異なるルートから導かれ、それぞれ個性をもって展開した。戒厳令下の社会状況の中で、1980年に中国仏教会との交流調印ののちに、正式に日本の教会系統の法座所、すなわち、豊田教会台北法座所(1985年)、大館教会台南法座所(1983年)、目黒教会屏東法座所(1985年)が設置された。そして、1989年には教会の系統からはなれて本部直轄の拠点とされた。1992年10月には社団法人中華在家仏教立正佼成会(全国的法人格)として法人格を取得し、翌1993年1月には中華在家仏教立正佼成会(台湾教会)が設立され、日本人教会長が派遣され、台北、台南、高屏(高雄と屏東)法座所が支部に昇格した。ところが、支部間の軋轢が生じ、台北、台南、高屏は各々地域の社団法人格を取得、三法人に分裂し、2000年に中華在家仏教立正佼成会は解散した。また、2008年には現地人を教会長として台北教会、台南教会が設立された。しかし、これまでの経過の中で、台北教会の基隆支部も台中支部も閉鎖になり、台南教会には高屏支部が所属していたが、台湾で一番早く佼成会が入った高屏支部は消滅し、現在は台北教会、台南教会ともに一本足で立っている状況になった。そして、各教会の個性よりも、本部との関係が重視されるようになった。これは本部の

統制が強まったともみえるが、簡や莊という一粒種が亡くなり、また幹部も高齢化や死去し、その力が弱体化するなかで本部が頼りにされてきたともいえよう。

これまでの歴史をみると、台湾において佼成会が最も活発に動いていたのは1990年前後から半ばであるように思われる。初期からの信者が60代半ばにさしかかったあたりである。その時期にはすでに、日本語世代だけでは先行きは見込めないと、青年部や婦人部の育成をしたり、積極的に文書布教を行い、また日本語教室を活用している。日本語から台湾語や北京語に読誦する經典も変えている。

本稿では台湾における佼成会の展開をできるだけ正確に記述することを意図した。年代や事実関係も含め、詳細に検討していくと、これまで流布していたものとは矛盾するところも多く、また、重要と思われる事項も抜けていた。高屏支部のように、リーダーの交代があり、また目黒教会との関係も、台北の豊田教会、台南の大館教会のような現在にもつながるかわりが見出せず、あとづけるのは困難な場合もあった。

さまざまな資料をまさに発掘し、聞き取りで補足していったが、当初は日本語世代が日本に対するなつかしさや日本語を話したいという動機で日本の宗教である佼成会にかかわっていったのかと思っていたが、検討している中で、日本語世代は教えを次世代に伝えることを比較的初期から意識していたことがわかった。日本語で直接的に教えを学ぶことができたことはメリットでもあった。そして、日系人のコミュニティとは異なり、エスニックチャーチ的に外部に閉じて居心地のよい空間をつくろうとするのではなく、日本語と現地語の両語に堪能な人が存在し、『中華佼成』を作成し、日本語教室や各種教室を媒介にしての布教などの取り組みが見いだせた。台南教会では文書布教に取り組んだ比較的高学歴な男性のグループがおり、台北教会の場合は、本部直轄になるまで、豊田教会を挙げての支援があり、「佼成会のいのち」と言われた法座が生きていた。しかしながら、現状では法座は活発ではなく、布教についても伸びてい

るとはいえない。

台湾では信仰は個人のもので、継承するという概念は薄いというのが、新規の入会者が少ない現状では信仰継承や二代目の発掘にかけなければならない状況がある。台湾における日本語世代の存在は、アメリカやブラジルなどで日系人から始まったところと類似の問題を抱えているように思われる。

今回は台湾でどのように現地の要素を取り入れているのか、日本的なもので、何が受け入れにくく、それに対してどのような工夫をしているのかといった現地化や文化的要素の取入れ、文化的違和感については言及できなかった。聞き取りを行う過程で出てきた問題は佼成会の基本である夫方妻方の双方を祀る総戒名への抵抗感である。父系の祖先祭祀をする台湾では受け入れがたいという。かつての日本語世代はそれほど抵抗なく受け入れていたものが、現在では難しくなっている。また法座についても台湾では人前で悩みを出さないというのが、かつて台北支部では悩みを出しての法座が行われてきた。

今回は歴史的展開を正確に記すことに主眼をおいた。この作業がこれほど困難を極めるとは思ってもみなかった。しかしながら、聞き取りも含め、さまざまな資料を文字通り発掘するなかで、資料的にも裏づけて行った。今後時間の経過とともに、さらに跡付けるのは難しくなっていくと思われるので、この時期にやることができよかったと思う。

註

- (1) 日本の領有(植民地)になる以前からの住民の範囲は、漢族系住民、台湾先住少数民族がある。漢族系住民には福建省から移住した閩南人(福佬人)と広東省に多く居住していた客家系の人々に分かれている。
- (2) 北に法鼓山、南に仏光山、中部に中台禪寺、東部に慈濟功德会と、台湾うまれの新宗教がある。これらの宗教に共通するのは現世で人々を救済しようとする姿勢で、多様なメディアを通して積極的な布教活動をし、教育活動、文化活動、慈善活動を行っている。従来の僧侶中心の寺院とは異なり、信者を組織化して様々な社会活動への参加を促している。

- (3) 現在は日本の佼成会では、導きの系統ではなく地域単位のプロック制をとっている。
- (4) 范涂玉英について詳しくは、第6章を参照のこと。
- (5) 屏東の目黒教会の布教については不明な点が多く、これまで法座所の設置年月が特定できなかったが、本部の資料『旧海外布教構想』を発見し、そこに1985年6月に范から物件を賃借して目黒教会が法座所を設置したことが書かれていた。この間の事情については第6章を参照のこと。
- (6) 第一回の台湾幹部研修会については、邱優枝(邱節子, 当時台南法座所事務長)が、『躍進』1988年12月号の「千載一遇の縁に恵まれたことへの報恩行の誓い」というタイトルの投稿記事の中に、「8月9日から3日間台湾各地から幹部が集い、初の練成会を行った」との記述がある。また、鄭旺牛(台南法座所)も『躍進』1988年11月号の「法華経を翻訳して台湾の人々に真の幸せを」の記事でこのことについて言及している。これらの記事を通して実施されたことは認識していたが、今回見つかった「佼成ニュース」1988年10月号で、8月に行われた実際の幹部研修会での映像が残っており、その様子や台湾の会員の感想を聞くことができた。講師は日本語で説明し、台湾の幹部は全員日本語を解していた。この号では「海外の菩薩たち 台湾」として、台北法座所や幹部研修会が紹介されていた。

「佼成ニュース」とは、毎月1日に各地の教会道場、地域道場で衛星放送を通じて放映されたもので、約15分の動画である。開祖・会長の動向、過去の映像のほか、各教会の信者の取り組みが紹介されている。
- (7) この月額約100万円の家賃は本部が寄付するというかたちで負担していた。この他の運営費は支部の独立採算制になっているということは、藤井 1996: 11にも言及されている。
- (8) これによって地域移動する場合、たとえば台南支部の信者が台北に移動した場合、台南支部から離脱して、台北支部に入りなおさなくてはいけないことになる。
- (9) 2008年～2009年にかけて、4つの教会において現地人が教会長となった。台北教会、台南教会、米国オクラホマ教会、韓国教会である。なお、台北教会、台南教会、オクラホマ教会は新設教会であった。
- (10) 長本教会長時代に同一人が支部長と理事長を兼務というのはよくないとのこと、どちらかを選ぶようにということになり、台北の簡は理事長を、台南の荘は支部長の役を選択した。
- (11) 佼成会でいう「選名」とは、通常本尊勧請の時に授与される五大真理(読み下しの意味、画数、陰陽、天地の配列、五行の配列)を鑑定した名前である。授戒の意味合いをもっている。
- (12) 簡汝廉の入会年については、台北の「社團法人在家仏教立正佼成会沿革史」年表に1971年1月8日に荻野高男の導きにより、中野教会入会、そして1972年3月に長女

の簡淑姿が本部で研修1年、翌年豊田教会での布教実習1年と書かれていた。また、1973年1月18日、中野教会から豊田教会への転籍という記載もあった。しかしながら『佼成年鑑』で確認すると長女の訪日は1975年12月との記載があり、これが正しいと思われる。沿革史年表には林清月の体験説法の日付は1984年が正しいのに1985年とあり、また1993年の入仏落慶も1994年とあるなど誤りも散見される。今回、簡汝廉の大聖堂での体験説法(1990年4月8日)の原稿が発見され、そこには入会は1971年1月28日と記載されており、検討の結果、これが正しいものと判断した。

ここでの記述は、台北の「社団法人在家仏教立正佼成会沿革史」年表、大聖堂での簡汝廉の体験説法原稿、妻の簡林清月の体験説法原稿、次女の簡妙芳の体験説法原稿、本部作成の台北教会の沿革、台北教会年表、元国際伝道部スタッフ竹野貴則による豊田教会元支部長の松田フジ子からの聞き取り、廣瀬幾世による元豊田教会長の鈴木基子、島田華代からの聞き取り、簡妙芳からの聞き取り、簡妙芳をとおしての姉(長女)の淑姿からの聞き取り、渡辺による簡妙芳および台北教会会員からの聞き取り(2012年、2017年)による。また、藤井健志論文には調査時点での具体的な記述があるので、参考にした。

- (13) 簡の体験説法によると、高校卒業後、ブローカーをやったりして、儲けては飲みまわり、ついに体を壊したので、父の激励のもとに小学校教員検定に合格して小学校の教員になり、2年後同じく小学校の教員だった妻と結婚した。その後子どもができたものの、教員生活5年目には、教員は活気がないものだと飽き足らず、早く社会に飛び出し、事業をしたいということで、教員を辞め、妻は転勤し、台北に出てきた。そして、1年後には儲けたり、損をしたり、借金をしたりして生活が乱れ、妻子と別居することになった。この状況は長く続き、義父母からは妻に離婚せよとの勧告があったくらいだった。
- (14) 台湾は父系なので、妻方を入れるということに対して抵抗がある。現在の台湾では総戒名について極めて強い抵抗がしめされているが、当時の日本語世代の人々がうけいれたことは特筆すべきである。
- (15) 1984年7月13日から21名の台湾の会員が本部での修行の後、2週間にわたり豊田教会(12名)と大館教会(9名)にわかれて布教実習を行った。8月4日に本部大聖堂で簡林清月は体験説法を行った(佼成新聞1984年8月10日号)。なお、簡や荘の説法原稿はパソコン入力したものが保存されていたが、清月の場合は原稿用紙に日本語で書いた自筆原稿が見つかった。
- (16) 長女が日本に研修に行くようになる経緯は、荻野が簡に長女を学林に送るようにと言ったという説が流布されており、また、台北教会の「社団法人在家仏教立正佼成会沿革史」年表にも1972年3月から本部研修とあった。豊田教会の関係者は学林から依頼されて豊田教会で引き受けたと認識していた。しかし、当時の佼成会には、海外修

養生制度はなく、学林の修行期間は4年間であった。また、台湾は戒厳令下で日本行きのビザをとるのにも制約があったので、看護学校(佼成会には付属の看護学校がある)に入学するという名目でビザをとったという話が伝わっていた。佼成会には佼成病院も看護学校もあるので、筆者をはじめ、看護師として学ぶというのを方便としてビザを取得したのかと思ったが、実際に彼女は台湾の看護学校を出た看護師だった。

『佼成年鑑』で確認すると、佼成会では1973年から留学生の受け入れを開始し、クメール共和国(カンボジア)、ネパール、インド、ベトナム(難民の受け入れ)からの留学生がおり、日本語の学習と専門教育、技術の習得の機会を与えていた。簡淑姿の記録については、『佼成年鑑』1976に、「1975年12月に台湾から新規留学生の簡淑姿(女、25歳)が来日、日本仏教一般の学習、本会教義の学習とその実習のため」とある。他の留学生とは異なる学習内容である。また『佼成年鑑』1977には「本会布教実習のため、多摩教区豊田教会における修行に入った」と記載されている。『佼成年鑑』の記載は信用できるものであり、1972年説は否定され、時期が特定できた。また簡林清月の体験説法では、年は記載されていないが、文脈から推測すると淑姿は1975年12月来日、1978年3月に台湾に帰国したとみることができる。

- (17) 佼成会の組織は、教会長—支部長—主任—組長—班長—一般会員となる。
- (18) 松田からの聞き取りは2016年に竹野貴則が実施したものによる。
- (19) 簡の体験説法原稿によると、簡が往復の航空券も準備し、世話になった人々にお礼を言うように妻の清月に訪日を頼んだとある。
- (20) 淑姿は日本から帰国後、約半年は在家の修行をしていたが、その後、長庚医院の整形外科で約半年過ごし、アメリカの病院のやけどの病棟での研修に派遣され、半年間学んだ。帰国後、やけど病棟の看護師長を2年務めた。結婚して夫の仕事の関係でアメリカに行った。1987年に母の清月が亡くなり、帰国し、青年部長にもなった。子どもはアメリカ国籍なので、その教育のこともあり1996年に再度一家をあげてアメリカに移住した。
- (21) 法座所になってからは台湾語の経典があった。現在は、青経巻は台湾語、三部経は北京語である。
- (22) 松田と小形は、1980年代はほぼ毎月台北を訪れたが、飛行機代、ホテル代など出張にかかわる費用は豊田教会で負担した(2020年11月20日に行った廣瀬幾世の元豊田教会長・鈴木基予からの聞き取りによる)。
- (23) 2020年10月3日に行った廣瀬幾世の聞き取りによる。鈴木基予は、豊田教会長、大月教会長、神奈川教区長兼横浜教会長、理事、布教相談役4期を歴任した。
- (24) 2016年の竹野貴則の聞き取りによる。また、「簡は芯が強く、教会長として菊地教会長や鈴木教会長を知っているので、それにそぐわない、日本から来た教会長には冷たかった」とも述べている。

- (25) 2020年11月20日の廣瀬幾世による鈴木基予からの聞き取り。
- (26) 藤井健志は、1991年、1992年、1994年、1996年に台湾の日系新宗教の調査を行ったが、そこには調査時点での佼成会の変化について言及している。藤井は台北で調査を行ったので、台南については伝聞のようである。今回精査して一部異なる見解のものもあるが、研究者による調査で、当時の状況がわかり、とても参考になった。(藤井1992、1993、1996、1997)
- (27) 中元節は中華圏(中国、台湾、香港など)独特の考え方で、旧暦の固定された日で、地獄の帝「地官大帝」の誕生日で、靈魂を鎮める日＝死者の日として位置づけられている。先祖が帰って来る他に、地獄の扉が開き、成仏を祈られなかった霊や悪霊たちも一緒にあの世から戻ってくるとされ、その霊を鎮める為に、玄関先に沢山の煮炊きした食べ物や飲み物、米などを供え、外に向かって供養を行う。米などは、供養の後、障害者施設などに寄付する。
- (28) 2012年に筆者が台北教会で調査を行った際にもこの話は聞いた。
- (29) 大槻は、本尊、守護神の勧請家で、教師の資格も持っている。大館教会で6年間、壮年部長の役にあった。妻は地区主任の役を10年間担った。
- (30) SHANZAIとは本部の国際伝道部で発行されているインターネット上の雑誌で、19ヵ国語に翻訳されている。SHANZAIはその後Living the Lotusと雑誌名が変更されている。立正佼成会のHPで公開されているのは過去4年分のみである。
- (31) 邱節子については、三女の長男の邱大晶(1980生)からの聞き取りから明らかになったことがあるので、以下に記す(2020年10月、廣瀬幾世による聞き取り)。

大晶は台湾の大学卒業後、台湾で仕事をしていたが、祖母(邱)が孫のうち誰かに日本語をきちんと学んでほしいと強く願っていたため、2005年に日本に来て、まずは日本語学校に通った。その後、早稲田大学理工学部 of 大学院に入り、東京の大手企業に入社した。結婚(北京大学卒業の中国人)もしたので、当然、台湾に帰ることはないとのことである。

彼は生まれた時から祖父母と一緒に中学2年まで暮らした。生まれて間もなく、母が店の経営を引き継ぎ、祖母が自分を育ててくれた。佼成会にも連れていってくれていたの、よく覚えている。(のちに明らかになったことでも彼の記憶は極めて正しかった。)

邱は山梨県出身で、東京に留学していた後の夫と知り合い、夫の故郷の台湾を旅行で訪れたが、戦争が始まってしまい、帰国できなくなった。そのまま残り、結婚し、夫婦で日本料理屋「小春」を始めた。娘が3人いる。

佼成会との出会いについては「お店によく来ていた大槻さんが、来る度に、佼成会の話をする。初めは愛想よくしていたが、他のお客さんもいるので、ずっと大槻さんについているわけにはいかない。それでもあまりにも熱心に勧めるので、根負けした

感じで入会した。しかし、教えを知れば知るほど、熱心な信者になっていった。」佼成会での活動については、「お店をしていたが、週に3日は法座所に通っていた。法座所では、ご供養してから、いろいろな話をしていた。悩み事相談も多かったと思う。自分は子供だったので、詳しくはわからなかったが、祖母は皆から信頼されていたと思う。主任もしていた。日本人の親友が1人いるだけで、後は全員台湾の人たちが会員さんだった。祖母はお店に来るお客さんや、知り合いを佼成会に誘っていた。時々はお店でも、佼成会の話をしていた。」

人柄としては、「家の中では、日本人だった。とても厳しかった。しかし、外では、すごく優しくかった。人に親切だった。人の話をじっくり聞いていた。」

体験説法 の原稿につかっていた邱陳節という名前の由来(台湾では夫の苗字、実家の苗字そして名前になる)については、台湾の以前の状況を知るのにも参考になるので、記しておく。「元々の本名は小侯節子。台湾で結婚し、戸籍は邱節子。しかし、当時、国民党が大陸から入ってきて、それに対抗するレジスタンス系の人、つまり昔から台湾にいる人(本省人)は、顔を見るだけで、元々の台湾人ではないことがすぐにわかり、どんどん捕まえていった。これは警察ではない。祖母は、日本人だったが、大陸から来たと思われ、捕まってしまう、とても怖い思いをした。祖父が助けに行き、日本人だから返してくれと談判して、救出してくれた。それ以来、台湾風の名前として、陳節と名乗った。家に電話があると、『陳節さんはいますか』と言われたものである。だから、台湾式に邱陳節となった。戸籍はそのままだったので、台湾での身分証は邱節子だった。後に節子から優枝と改名した。)(なお、優枝は、本部からの選名であり、それを本名にしたことが廣瀬との話の中ではじめてわかったという。)

- (32) 法座所になった荘宅では、集まった会員たちに、荘の妻が、毎朝、朝ご飯を買ってきて出してくれた。荘は法座所の無償提供を含め、その後も経済的に台南の佼成会の支援をした。
- (33) 台南には第一高等女学校と第二高等女学校があり、第一高女は日本人、第二高女は台湾人だった。ここに入るためには学力とともに親の経済力や社会的地位も必要で、第二高女卒ということはとても名誉であり自慢なことであった。陳は第二高女時代の卒業アルバムを用意して筆者を迎えてくれたが、そこでは日本式の教育が行われていた。
- (34) 読み方では台湾語と北京語は異なる発音だが、書き言葉は中国語で共通である。
- (35) 『台南佼成』と『中華佼成』の第2期までの表紙は、色紙に黒字で印刷したものであったが、その後はカラーの表紙に変わった。『台南佼成』『中華佼成』『佼成 中文版雑誌』と誌名を変え、1999年2月まで定期的に発行された後、『佼成 中文版』へと誌名変更(本部の開祖顕彰資料室と国際伝道部に残っているのは、第1期2004年2月と5期2004年10月のみ。少なくとも5期あった)、その後、『佼成』(残っているのは2006年2月、6

月、10月号と2007年2月号の4冊のみなので、詳細は不明。2006年10月号は台湾教会発行と記載されている）、そして2011年4月（1期）からは『台南佼成』と名称変更し、2017年4月（10期）で停止した。なお、これらの時期には月刊ではなく、年に4回、最後には年に2回となり、縮小していった。

1997年の業務報告書には『佼成 中文版雑誌』について、その経営が重くなってきたことで、発行停止が検討されていた。台北、高屏からの注文数の減少、翻訳をする人が少なくなり、翻訳料が高いので経費がかかるので継続が難しく、法人の貯蓄からかなり多額を発行出版にあてていることに言及されている。また、この間、一法人三支部がさまざまないきさつの末、三法人に分割され、『中華佼成』創刊当時の協力関係が失われたこと、そして翻訳を担っている信者は高齢化していき、発行が難しい状況になったことが推測される。その後の出版は頻度も低く、散発的になり、最後には『台南佼成』という初めの誌名に戻り、休刊となった。

- (36) 1993年2月26日の佼成新聞の長沼理事長の台湾・香港訪問に関しての記事によると、台南支部法座所について以下の記述がある。「会員世帯数870。文書による布教が活発に行われ、布教誌『中華佼成』を作成。編集スタッフが佼成新聞など機関紙誌から庭野開祖、庭野会長の法話、信仰体験などを抜粋し、月刊誌として発行している。同誌は、台湾、香港をはじめ世界各地の中国人に愛読され、1月で40号を数える。」なお長沼理事長の空港への出迎えは40名、歓迎式典には130名の会員が参加した。
- (37) 黄久美(女、1944生)によると、中国大陸にも文書布教をしたいと思い、中国大陸の出身地の親戚に『中華佼成』を送っていたことがあるが、中国共産党が宗教に対して厳しくなり、また中国と台湾の政治状況によって「中華」という名称は中国大陸を意味するので使わなくなったという。
- (38) 『中華佼成』などの現地機関誌への着目は、実は筆者にとって別に明らかにしたいこととの関連で調べ始めた。台南に関しては、微妙に年月の違う年表が4種類あり、どの年月が正しいのかを確認することから始まった。特に問題になったのは、1994年に永福路から公園南路に道場を移転したという説と、それは1997年であるとの説であった。台南支部北区連絡所というのは何か、永福路と同時に併存していたのか、それともそうではないのか、という疑問があった。台湾の日系新宗教を研究している藤井は、1994年に行った調査で、台北支部からの伝聞ではあるが、「台南にも新しく台南北地区に仮法座所が設置された。なお、1995年には台南に道場を創るという計画があるという」と書いていることも参考になった(藤井 1996: 11)。大本尊の勧請申請書も調べ、『中華佼成』と『佼成 中文版雑誌』の奥付の記載を確認し、1994年6月に公園南路の北区連絡所設立が正確であること、また、永福路と公園南路の北区連絡所が併存していた時もあり、1997年1月に台南支部が公園南路に転居、4月庭野日鑑会長による入仏式が正しいという結論になった。台南の会員にも尋ねたが、永福路と公

園南路が併存していたと言ったのは一人だけで、あとは併存なしのことだった。一時期は4階が事務室で、3階が法座席であるとも考えた。また公園南路の道場は3階にあったと言っていた人がいたが、実際は4階であり、3階は永福路の時のものだった。年の記憶はない人がほとんどで、記憶は文書によって跡付けられてやっとはっきりした。

『佼成 中文版雑誌』第1期から14期では台南支部の所在地は永福路の住所になっており、第15期からは公園南路の住所になっている。

- (39) 藤井(1993: 14, 20)によると、1992年7月から台南では日本語による經典読誦・唱題を一切やめた。日本語のほうが使いやすい信者はいるが完全に切り替えられた。これは日本語を理解できない人が増えていること、今後若い人に教線を伸ばすためにいつまでも日本語を使うわけにはいかないという判断などに基づいている。また、これについては台南法座所を1カ月間にわたって調査した人(佼成会の会員と推定)から教えてもらったことであるという。また、こうした切り替えを佼成会では「現地化」と呼んでおり、「現地化」は佼成会海外布教課の方針でもある、と言及されている。しかしながら、筆者がこれまで検討してきたことから、必ずしも本部側の意向に従うというのではなく、台南の人々の将来を考えての発想のなかから生まれてきた色彩が強いと思われる。
- (40) 2020年10月に行った黒川からの聞き取りによると、范は、先に武蔵野音大に留学していた長女曉枝と共に、1967年3月に日本女子大に入学する次女慧芳のために、自身の母校でもある日本女子大の恩師である岩田佼成病院長(当時)を訪ねた。ちょうどその日は佼成会の命日でもあったため、岩田に勧められるがまま、大聖堂を参拝すると、図らずも庭野日敬会長(当時)の法話を直接聞けるまたとない機会を得た。その内容にいたく感激し、黒川にその場で入会を希望したが、当時入会するには、どこかの支部に所属する必要があったため、東海が目黒支部だったこともあり、山崎隆世目黒支部長に直接頼み、日本での入会手続きを取ったという。
- (41) 『佼成』1967年5月号の東海昌道の「台湾布教記」によれば1967年1月が正しい。
- (42) 本尊申請書の原物にあたったところ、范は岡山教会からの申請となっているが、当時の申請書によると、申請者が岡山教会長ではなく、本部の布教開発の西川教務部長印が押印されているので、特別の扱いであったことがわかる。
- (43) 1975年の第3回「青年の船」の団長だった庭野日鑑次代会長と、范涂玉英、台北の簡汝簾、台南の莊金泳と大館教会の大槻定央は面会している。なお、台北で簡、莊、大槻と共に写っている写真があるが、黒川によると范も面会したというが、范の写真は確認できなかった。
- (44) 1978年当時の布教師制度として教師補、教師、正教師の3段階があった。教師補と教師は各教会で研修が行われた。教師補は根本仏教、教師は法華経を学び、教師補は本部の規定を満たせば認定され、教師は全国一斉の検定があった。その上に正教師が

位置しており、入科試験に合格後、3泊4日の集合教育を年7回受けた後に得られる資格である。『佼成年鑑』1978によると、正教師第20期研修生入科試験は、集合教育受験数3,336人、合格者1,006人、通信教育受験数418人、合格者158人であった。因みに同年の教師資格検定者は受験者7,389人、合格者6,704人、教師補資格認定者14,875人である。

- (45) 目黒教会から布教支援に行った鈴木孝枝元教務部長の話(同居していた姪の鈴木千鳥からの話)では、当時の屏東の范の家は、道路から門に入った後も、玄関に行きつくまでに車でずっと乗っていくほどの広大さであったという。
- (46) 浄心法師は、『躍進』1991年10月号に「常不輕菩薩の精神で真の世界平和を」のタイトルで寄稿している。その際の肩書は、中国仏教会台湾省分会会長・世界仏教僧伽会副会長である。
- (47) 黒川によると、范は日本に帰化し、日本名の高平佳代子、夫は高平昌英と庭野日敬会長(当時)から名付けてもらったとのことである。また庭野日鏡現会長の妻は日本女子大出身で范と同窓であったため、自宅に訪問するような関係だったという。また、范の夫は1986年に亡くなったが、その際、長沼理事長の仲介で佼成霊園に墓があり、范の夫の13回忌法要には長沼理事長も参列したとのことである(黒川所持の写真により確認済み)。范は夫の死後、茨城県の小川町から東京都北区王子のマンションに転居し、一人暮らしをしていた。長男は茨城県銚子市で病院に勤めていた。一時、范は北教会に所属したこともあるが、のちに黒川が所属する埼玉県泉の浦和教会に籍を移した。茨城県にいた時も茨城教会に所属するということではなく、日本で目黒教会や北教会でどのような活動をしていたのかはわからない。黒川によると本部直轄のような扱いで地域の教会とはあまり関わりをもっていなかったようである。
- (48) 黒川からの聞き取りによると、林と范の父親が非常に親しく、范の実家である涂家の財産管理を林は全面的に任せられていた。范が日本に行く際にはボディガードのようにいつも付き添っていた。日本に滞在する時にはいつも養成館に泊まり、そこで佼成会のことを学んだ。
- (49) 2020年10月に聞き取りをした屏東布教に赴いた目黒教会の鈴木孝枝元教務部長の姪で当時同居していた鈴木千鳥によれば、屏東布教の際には范の屏東や高雄の家にも行っていたという。鈴木は范の夫の葬儀(1986年)にも参列している。そして一番布教に歩いていたのは林応全夫妻だったと叔母から聞いていと語っている。林応全との手紙のやりとりは2011年まで続いていた(手紙の所在を確認済み)。
- (50) 台湾教会高屏支部布教拠点移転に関する内部資料の記述による。
- (51) 高屏支部の会員数は、海外布教課の資料では、1990年12月末で234世帯である。
- (52) 2020年10月の廣瀬幾世による後藤益巳からの聞き取り。
- (53) 謝恵美の次女である麗華からの聞き取り(2020年9月)によると、謝恵美は社団法人

台湾における立正佼成会の展開

屏東仏教会の理事・監事も務めた。高齢になって、高雄から屏東まで通う体力もなくなったが、2013年に亡くなる間際まで、支部と残された会員のことを気にかけていたという。

- (54) 本尊勧請申請書によると1998年5月10日に高雄市林泉街連絡所(責任者:胡珍安), 高雄市文化路連絡所(責任者:陳碧蕊), 鳳山市文南街連絡所(責任者:林光子), の3連絡所に本尊が勧請されている。
- (55) 台湾教会発行の『佼成』2006年10月5日号に記載。内部資料によると, 2006年2月8日から2011年2月7日までの賃貸契約書があり, 賃料は1年目から3年目までは月に3万台湾ドル, 4年目からは3万5千台湾ドルで, 移転に伴う費用も含め本部が負担した。
- (56) 父は李金成(1934-2015)である。2007年の高屏支部名簿によると李明翰の入会は1999年10月1日となっているが, これは法人が1999年10月に発足したことを起点としており, 実際の入会年ではない。海外修養生の試験が1997年に行われているので, それ以前の入会だと思われる。台南教会の場合も同様であるが, 法人発足に合わせて新たに名簿を作り直しているのので, 古い幹部ほど本当の入会年が不明である。
- (57) 内部資料の台湾教会三支部幹部合同会議議事録に詳細な記録がある。

参考文献

- 郭麗濱「私の入会と活動の履歴」, *LIVING THE LOTUS*, vol.114, 2015年3月号, 6-7頁, 立正佼成会国際伝道部。
- 邱陳節「佼成会が変えてくれた人生」, *SHANZAI* Vol.93, 2013年6月号, 6-7頁, 立正佼成会国際伝道部。
- 『佼成』(機関誌)佼成出版社
- 『佼成写真年鑑』佼成出版社
- 『佼成新聞』(機関紙)佼成新聞社
- 「佼成ニュース」1988年10月号(映像資料)
- 『佼成年鑑』立正佼成会
- 『躍進』(機関誌)佼成出版社
- 寺田喜朗, 2009, 『旧植民地における日系新宗教の受容——台湾生長の家のモノグラフ』ハーベスト社。
- 藤井健志, 1992, 「台湾における日系新宗教の展開」『東京学芸大学紀要 第2部門』43, 41-51頁。
- , 1993, 「台湾における日系新宗教の展開(2)」『東京学芸大学紀要 第2部門』44, 13-22頁。
- , 1996, 「台湾における日系新宗教の展開(3)」『東京学芸大学紀要 第2部門』

- 47, 11-18頁。
- , 1997, 「台湾における日系新宗教の展開(4)」『東京学芸大学紀要 第2部門』48, 47-53頁。
- , 1998, 「台湾における天理教の布教過程(1)」『東京学芸大学紀要 第2部門』49, 25-40頁。
- , 1999, 「台湾における天理教の布教過程(2)」『東京学芸大学紀要 第2部門』50, 27-45頁。
- , 2000, 「台湾における天理教の布教過程(3)」『東京学芸大学紀要 第2部門』51, 1-17頁。
- , 2007, 「戦後台湾における日本宗教の展開」『宗教と社会』13, 105-127頁。

執筆分担

渡辺雅子 はじめに, 第1章, 第2章, 第3章, 第4章, 第5章, おわりに
廣瀬幾世 第6章

謝辞

本論文はたくさんの方々のお世話になって完成した。展開過程をあとづけるにあたって、相矛盾する情報や不明なことが多く、まるで「謎解き」のような感じであった。

分担執筆者である台南教会長の廣瀬幾世氏は、こちらの意図を正確に読み取り、事実の解明にあたって、自発的に、必要と思われる人々からの聞き取りや資料収集を行ってくださった。台湾布教にかかわった日本での関係者はすでに故人になった方も多かったが、手づるをたどり、多様な関係者からの聞き取りを行い、情報を収集してくれた。これは同じ信仰をもつものとしての信頼感の元で行われたのではないかと思われる。一研究者がそれを行うにはラポール(信頼関係)の形成から始める必要があり、紹介してもらわなければならない、短期間でできることではなかった。廣瀬氏の聞き取り能力については、これまで聞き取りを主体に調査を行ってきたものとしても、すぐれたものだったと思った。また、台湾の信者に対しては、廣瀬氏が中国語を使い、ラインで質問し回答してもらった。ラインだと短時間で答えてもらえることも発見だった。

資料については、開祖顕彰資料室スタッフの金光位枝氏の誠実な努力に、心からの感謝の意を表したい。人間の記憶にはあいまいな点があり、事実関係や、とりわけ時期については文書によって特定できたことも多かった。金光氏は、文書箱(段ボール箱)を20箱以上あけて、その中から関連する資料を探してくださった。体験説法原稿、大本尊勸請申請書、重要事項の記載証明書、内部報告書、アルバム等である。そして、『佼成新聞』、『佼成』、『躍進』といった機関紙誌、そして『佼成年鑑』や『佼成写真年鑑』などから台湾関係の記事を探してくださった。金光氏の綿密な作業なしには正確を期すことはできなかった。

台湾における立正佼成会の展開

この他にも多くの方々にお世話になった。以下に名前を挙げて感謝したい(敬称略、五十音順)。

〈日本側〉

赤川恵一(日黒教会長)、小野隆央(総務部スタッフ)、尾本貢一(元国際課員・元教団理事)、北村浩一(佼成出版社アーカイブズ課課長)、黒川享市郎(元団参課・元佐原教会長)、後藤益巳(元台湾教会長)、猿楽年央(豊田教会長)、島田華代(元豊田教会長・前教団理事・参務)、鈴木千鳥(日黒教会元教務部長鈴木孝枝の姪)、鈴木基予(元豊田教会長・元教団理事)、竹谷祐市郎(国際伝道部次長)、竹野貴則(国際伝道部元スタッフ・中国支教区教務員)、成田雅野(国際伝道部スタッフ)、萩原透公(国際伝道部元次長・練馬教会長)、矢島希和子(国際伝道部スタッフ)、山崎喜代(元世田谷教会長・山崎隆世元目黒支部長の長男の妻)

〈台湾側〉

台北教会：簡淑姿(元青年部長、簡汝廉の長女)、簡妙芳(教会長)、呉玉桂(元会計)、ほか台北教会の方々。

台南教会：郭麗嬪(元主任)、郭玲吟(主任)、邱大晶(元主任邱節子の孫、日本在住)、胡利安(支部長)、黄久美(理事)、呉麗鳳(理事長)、蔡麗金(前教会長)、莊碧娟(元教会長莊金泳の長女)、陳雅鶯(出納兼主任)、陳淑芬(主任)、程春霞(会員・元海外修養科生)、林靖綺(総務部長)、ほか台南教会の方々。

付記

本稿は、平成24年度科学研究費補助金(一般研究C)「日本宗教の異文化布教に関する社会学的研究」(研究代表者 渡辺雅子)および2017年度明治学院大学社会学部附属研究所一般研究プロジェクト「日系新宗教の海外布教」(研究代表者 渡辺雅子)による研究成果の一部である。